高知市文化財調査報告書第2集

高知市　塚の原古墳群

岡本健児・廣田典夫・宅間一之

昭和55年3月31日

高知市教育委員会

はじめに

高知市のもつ文化遺産は、明治の自由民権運動をめぐる史跡等を中心としつつ、さかのぼって、鎌倉期を中心とする彫刻・建築がまず頭に浮かんできます。

紀貫之の「土佐日記」の時代、高知平野の大部分は海底であったことからみても、それはうなずけることでもあります。

しかしながら本市には、北山週辺を中心に規模的には小さいながらもたくさんの埋蔵文化財が点在しています。

都市化の波はその周辺にも及び、急速な開発行為によって破壊の危機に直面しているのがこれらの埋蔵文化財でああります。

今回のこの報告書もその開発を因として行った発掘調査の報告であります。

しかし開発に起因するとしてもいつの間にか破壊されて消滅していく遺跡がある中で、この塚ノ原古墳に関しては、その開発を行う塚ノ原土地区画整理組合をはじめ関係者の方方の積極的なご協力により学術的な発掘調査が充分に行えたことは、まことに幸いでありました。

本書が、先人の遺跡をそのまま全て伝えることは困難であるとしても、専門的に調査・記録されたこの内容が後世の人に継承していくひとつの資料として大いに活用されることを念じております。

現地調査及び、本書作成にあたってご協力賜った岡本健児、廣田典夫、宅間一之の諸先生をはじめ関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和55年３月31日

高知市教育長　山本準一

例　　言

1．本概報は、高知市塚ノ原第一土地区画整理事業に伴い、高知市教育委員会及び塚ノ原第一土地区画整理組合が実施した塚ノ原古墳群の緊急発掘調査の概報である。

2．調査は、岡本健児（高知女子大学教授）、廣田典夫（高知ろう学校教諭）、宅間一之（高知県教育委員会文化振興課）が担当した。

3．発掘調査は、昭和53年９月25日から10月３日まで実施し、それ以後出土遺物、図面整理を行い作業を完了した。

4．本概報の編集は宅間一之が担当し、執筆には岡本健児（総括）、廣田典夫（3．一号古墳の調査・４．二号古墳の調査）、宅間一之（1．塚ノ原古墳群の位置と概要・２．調査にいたる経過）があたり、遺物実測図は廣田が、写真は遺構を宅間、遺物を廣田がそれぞれ担当した。

5．遺構の測量は、高知市都市計画課・田村誠良、株式会社大和測量設計事務所の大黒俊和・谷川斉・有沢賢一があたった。

6．発掘調査の事務は、高知市教育委員会が担当し、社会教育課・山本修三・川村行宏・江口浩・西田幸人・町田尚敬・深田信秀がこれにあたった。また調査協力者として、塚ノ原土地区画整理組合（理事長・岡林博）及び株式会社協明土建の吉村藤夫・岡村橘夫・町田孝司・鎌田永伸・門脇洋海・山本康二・大峯勲・西本順一・中山隆らの協力を得た。

目　　次

はじめに

例　　言

1．塚の原古墳群の位置と概要 …… 1

2．調査にいたる経過 …… 5

3．一号古墳の調査 …… 6

　A　墳丘と石室 …… 6

　B　遺物出土状態 …… 9

　C　遺　　物 …… 9

4．二号古墳の調査 …… 15

5．総　　括 …… 18

1．塚の原古墳群の位置と概要

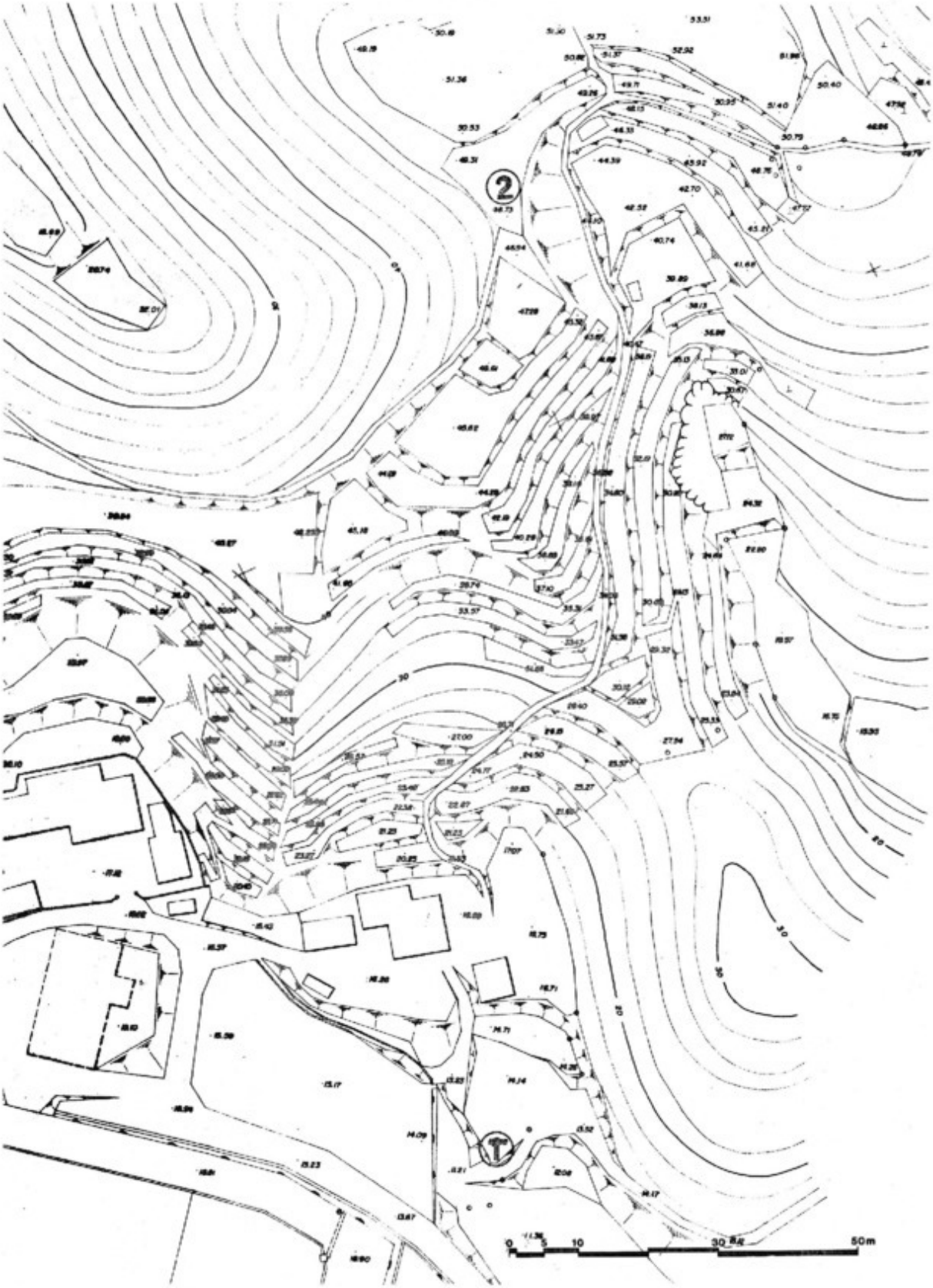
塚の原古墳群は、高知市街地の西端であり、現在宅地造成や新道建設等の開発著しい地区である。県道小松・高知線の高知商業高校より北に広がる「塚の原佐宗山団地」の中央道を北へおよそ200mの地点である。かつては、「鏡村に通ずる県道より蓮台への路に入り込み、２丁位にして小溪流を渉り、溪谷の小田畝を北へ進み、山根を西へ辿りたる南面の丘陵（小溪流より５丁位）の所にして、上は雑木林にて、東西の地域はすでに麦畑の斜丘」[1]であったようだが、今はその面影はまったくない。

塚の原古墳群は、「塚の原一号古墳」と「塚の原二号古墳」の２基である（第１図)。古墳群の所在する地点は、かつて鏡川が乱流し形成した第１次鏡川三角州の北辺末端杓田北方の谷奥である。谷の入口はエボシガタとよばれ標高8.8m、幅40mと狭く、その奥に佐宗、三又、雨堤の三つの谷が存在する。本古墳群は佐宗の谷に所在し、一号古墳が塚の原佐宗144番地、標高12.8mの丘陵端部で、谷口より約200mの距離にある。また二号古墳はここから100mほどの山道をのぼった塚の原大かり又214－２～25番地、標高約49mの山頂近くにそれぞれ所在する（第２図)。また、この古墳群の西側の佐宗山をへだてた塚の原には、その地名からしていくつかの塚の存在も予想される地点である。いずれにしても、本古墳群は、西に朝倉古墳群、伊野町枝川古墳群、東に福井・秦泉寺・一宮の古墳群へとつながる高知市北部山麓地帯の台地丘陵に分布する古墳群の一つであり、ことに本古墳の成立を先にのべた鏡川三角州の開拓期と関連をもって考えることは不可能であろうか。

本古墳群の発見は、昭和3年３月土地の住民岡林貞吾が開こん中「石の積み上げたものががあって、その積石の前に土器」[2]があったとの報告に基き、史談会の寺石正路･松山秀美･武市佐市郎・桑田精一と県・市の係官らによって、「疑ひもなく上代古墳の遺址」[3]と確認されたのが最初である。この古墳は、現在は「塚の原二号古墳」とよばれているものであり、調査にあたった武市佐市郎は、「既に天井石もなく、一部は崩壊して居ったもので、土器数個を発掘出土したことによって全く整理は終り」[4]、改良された麦畑の「斜丘の下の石垣は、この古墳の石廓に使用した石にて築かれて居った。一体の面積よりみて、余り大きな古墳でなく、小型のものと思はれた。推定によって羨道は南にありしが如く、所謂南口のものである。島崎書記は高さ４尺、幅２間の石廓であったと言はるるも、全く完全に破壊されているので果して然るものかは疑問である。而して開こんの際祝部土器が出土した事によ

古墳分布図
(高知県歴史地図)

第1図　1：2500



第２図　塚の原古墳群周辺地形図

りても、古墳であったことは認められる。高知市唯一の古墳を失ったことは如何にも遺憾」[5]としている。

また川田信敏は、本古墳を「杓田古墳」とし、「すでに破壊され形態を留めざるもので、出土物は須恵器の他その種類明確ならざるもの」[6]と報告している。さらに安岡源一は塚の原口細山に所在する古墳で、南面した後期横穴式石室の円墳で、出土物は須恵器と銀環、古墳は現有せずとしている[7]。以上諸氏の報告からして２号古墳はすでに破壊され消滅していたことは疑ひもない事実であるが、昭和27年段階ですら、一号古墳についての報告は全くない。しかし安岡源一の報告している銀環については、筆者は一号古墳出土遺物と従来理解していたが、そのことも含めて、発見時期や状況を明確にする資料は現存しない。一号古墳の記録上の初見は、昭和37年度国庫補助をうけ実施した遺跡台帳作成のための地名表に、横穴式石室二基、出土品須恵器・銀環との記載であり、これに基いて作成された地図にいたり、はじめて、「塚の原一号古墳」「塚の原二号古墳」とその存在が明確化されている。

（宅間）

註

(1) 武市佐市郎「土佐古墳の分布」土佐史談第五拾壱号　昭和10年４月

(2) 註(1)と同じ

(3) 土佐史談第弐拾弐号　昭和３年３月

(4) 註(1)と同じ

(5) 註(1)と同じ

(6) 川田信敏編「土佐史前時代遺跡遺物分布地名表」昭和13年11月

(7) 安岡源一編「高知県縄文式・弥生式・古墳文化遺跡地名表」昭和27年

2．調査にいたる経過

昭和53年７月、高知市塚の原第一土地区画整理組合から、本古墳群を含む約6,500万㎡にわたって、すでに造成されている塚の原佐宗山団地造成区域の拡大と、横内地区への新道建設計画が高知市教育委員会に伝えられた。高知市教育委員会は工事予定地と古墳群とのかかわりあいを調査、その結果古墳は工事により消滅する可能性が大きく、関係者との間において古墳保存のための協議にはいった。しかし、昭和53年８月７日付で、岡林博、塚の原第一土地区画整理組合理事長から、「土木工事のための埋蔵文化財発掘届」が提出された。高知市教育委員会は、発掘調査担当者、土木工事の主体者及び施行者等と緊急発掘調査のための協議を行い、その結果、昭和53年９月25日から記録保存のための緊急発掘調査が実施されることとなった。

調査は、すでに工事が進行中の二号古墳から開始されたが、前述のように発見当初からすでに破壊されている古墳であり、ミカン畑の岸端にわずかに残る石積みを古墳に使用されていた石と推定し発掘をすすめたが、調査は困難をきわめた。

一方一号古墳についても、かなりの破壊が予想された。昭和49年６月、塚の原保育園造成工事の際、一号古墳より下方30mの地点で、80×80cmほどの石が数十個、田と市道の段差2.5mのところで発見されたことがある。その積み石の具合から、市道下に埋もれた古墳が予想され、塚の原三号古墳の発見と報ぜられたことがあったが、これらの石は、一号古墳の破壊された石が転用されていることが判明したことや、周辺の小川の改修や、農業用ため池工事等がそれを如実に物語っている。発掘前は、竹と雑草木が繁り、わずかにマウンドらしい土盛と、その頂の小祠が古墳を推定させる唯一のものであった。　　(宅間)

3．一号古墳の調査

A．墳丘と石室（第3・4図　図版1～7）

墳丘の南西部は相当前に道路工事と農業用の溜池をつくるために削平されていた。残る墳丘は東側約2/3程である。周溝からみて墳丘の径は裾で12m程とみられる。

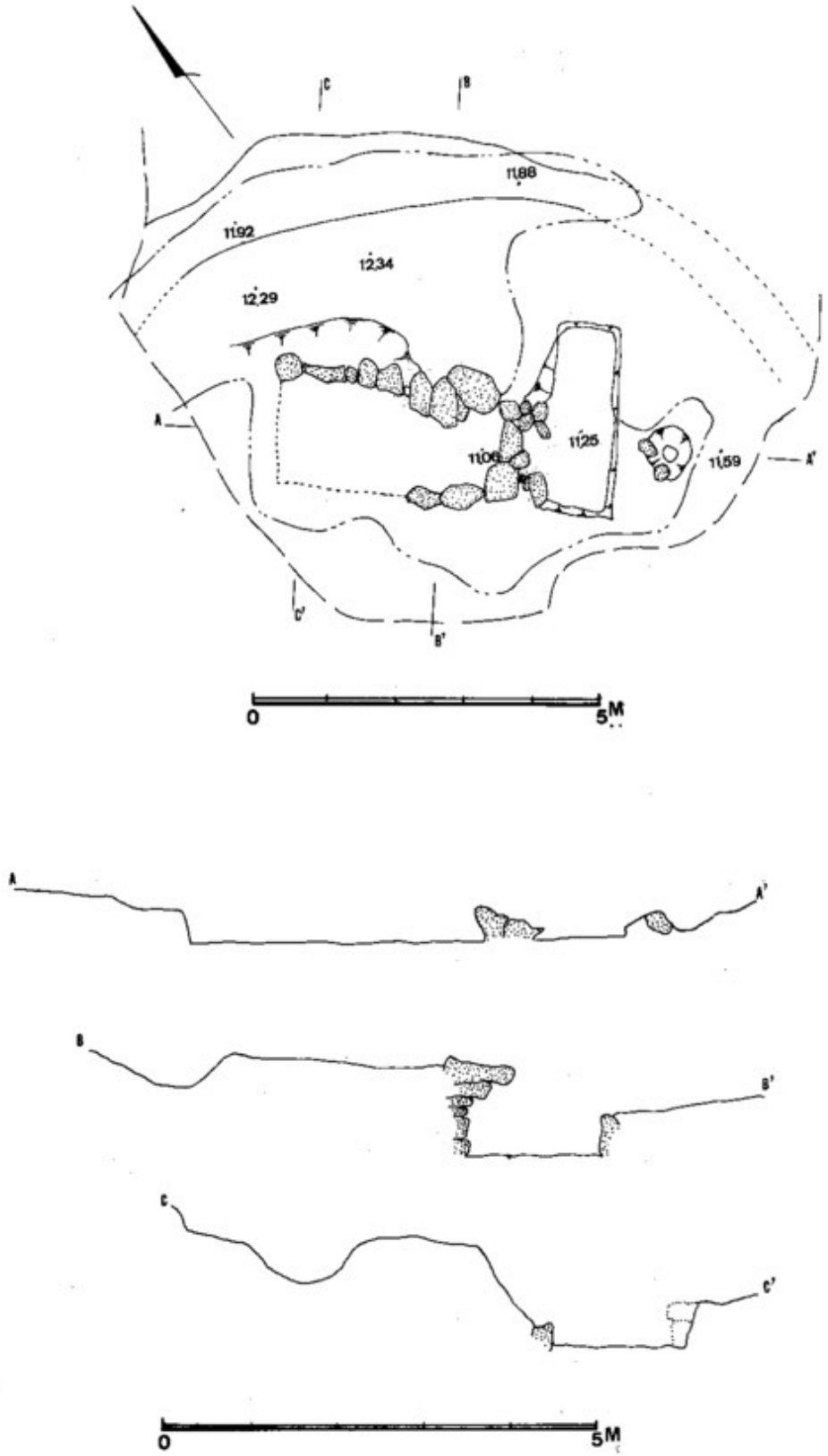
一号古墳は外径12m・内径10mのほぼ同心円内部をU字型に、深さ20cm前後掘り割る周溝によって墳丘裾を定めている。周溝は地山層である礫混じり黄褐色土層を掘り込んでつくられ、北側が深く南にまわるにしたがい、溝は幅がせまばり深さも浅くなる。石室主体部は礫混じり黄褐色土層である地山を深さ1.5m掘り、その上に黒褐色粘土を敷き石室基底部としている。墳丘は地山層の上に少量の礫を含む黄褐色土を盛り、さらに黒色腐蝕土を盛って築造している。墳丘の高さは確認できなかった。ただ石室側壁の一部が基底部より1m強残っていたことによって推察すると、築造時には石室の高さは2m前後であっただろうから、その上の盛土は2mぐらいあったと考えてよくはないだろうか。すなわち墳丘最頂部までの高さは、玄室基底部からは約4mあったと考えられる。周溝は先述したようにU字型を呈するが、底部には玄室基底部にみられた黒色土がみられ、東周溝の一部には礫が置かれていた。この周溝からは遺物の出土はなかった。

石室構造は両袖式の横穴式石室である。石室の北西部は墳丘が削平されたときに、根石まで抜き取られている。玄室東側壁は玄門よりの部分は五段残っているが、奥壁に近い場所は一段のみ残る。西側壁では玄門よりの三個が根石のみ残っていた。奥壁は東端の一個があるのみで他は残っていない。石室規模は玄室長3.2m・玄室幅は中央部で1.4m・玄門部で1.3mで、玄室は中央部でややふくらむが、ほぼ長方形を呈する。羨道は長さ0.8m・幅0.6mと小さい。なお羨道と玄室の境には幅60cm×30cm・高さ40cmの仕切石が置かれている。

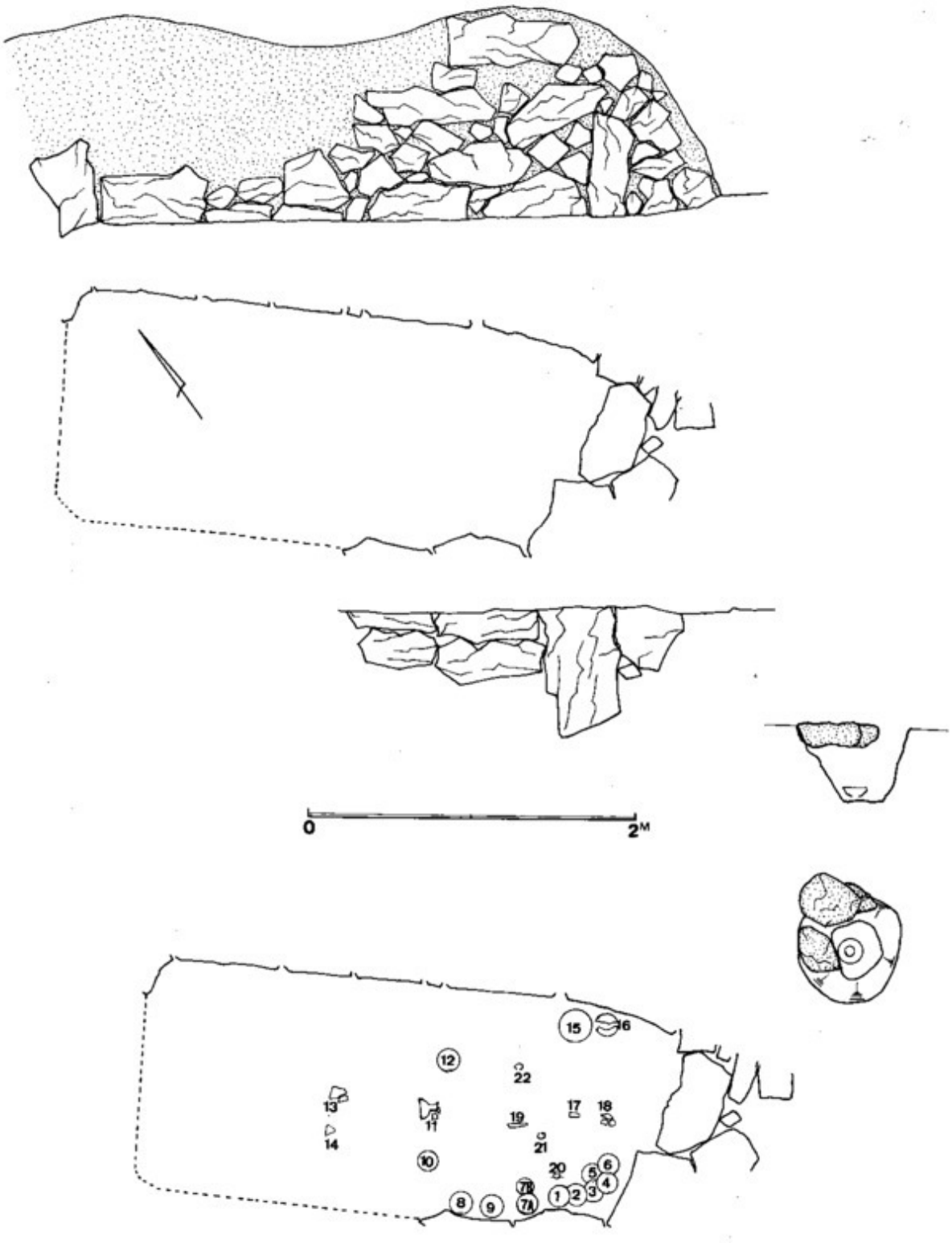
東側壁西側壁とも根石の大きさは、ほぼ同じで60cm×20cm内外である。東側壁上部には持送りの手法がみられる。玄門の両側壁は縦積みで東側は幅20cm・高さ60cm西側で幅30cm・高さ80cmである。前に述べたように両袖式であるが、ただ東玄門部は袖の出が少なく、片袖に近いつくりである。

次に羨道部の南1mに円形の墓前祭祀をおこなうためにつくられたとみられるピット状遺構が残っていた。このピットは上面70cm・深さ50cmで周囲に三個の栗石がみられた。

羨道方向はN60°Sである。　（廣田）



第3図　塚の原一号古墳



第4図　塚の原一号古墳、石室と遺物出土状態

B．**遺物出土状態**（第４図　図版８～10）

復元できる須恵器は玄室内から19個、ピット状遺構内から１個出土した。ほかに玄室内から銀環３・鉄刀子２が出土した。これらの副葬品出土地点は次のようである。

玄室西側壁の玄門よりから、坏・坏の蓋・高坏・短頸壺の順に発見されたが、一部のものは重なった状態で出土した。これからややはなれて埦・高坏・広口壺・蓋が発見された。次に玄室中央部では玄門部から順に須恵器片・鉄刀子・銀環３・鉄刀子・高坏・蓋・台付長頸瓶・蓋・人骨片が発見され、玄室東側壁より須恵器の坏・広口壺が見された。これら出土の副葬品の中で、第４図20と22の銀環はややはなれているが対になる。

墳丘と石室の頂で少しふれたが、一号古墳の削平がおこなわれた時に須恵器の高坏・坏の二個と、銀環も１個出土している。これらの遺物は玄室では西側壁の奥に近いところから出土したことが考えられる。

石室南面の墓前祭祀跡とみられるピット状遺構内からは高坏の脚部が欠損した、坏部のみが発見された。坏部からみると長い脚をつけた高坏であろう。（廣田）

C．**遺　　物**（第５・６・７図　図版16～19）

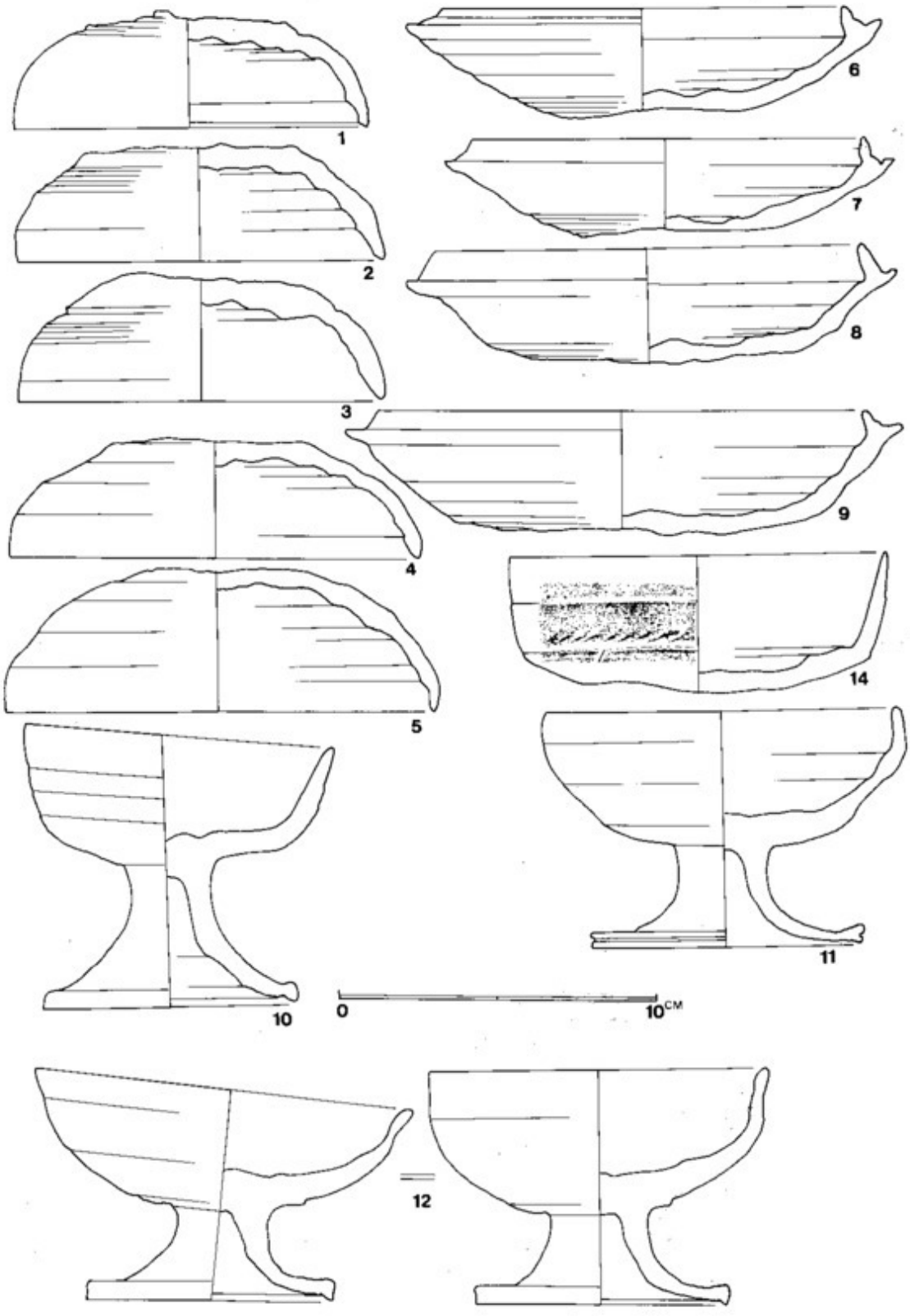
銀環（第７図　図版19）

三例あって大きさは長径3.1cm・短径3.0cm・太さ0.8cmのものが２個、今一つは長径2.6cm・短径2.3cm・太さは0.6cmである。三例とも鉄地銀銅張りである。大きい対をなす銀環は腐蝕して剝離がひどく、中実の鉄地がみられるのみである。小さい方はわりによく残っているが一部剝離した部分からは緑青が吹いている。

鉄刀子（第７図　図版19）

鋒の尖端がわずかに欠げた23は残長14.2cmあるから原形は15cmぐらいであろう。刃部の長さ10cm・最大幅1.1cmを測る。24は鋒の先が欠げている。残長10cmあるが、原形は12～13cm程度が考えられる。現在刃部の長さ5.5cm・最大幅1.6cmである。両鉄刀子の柄部長さは５cm前後とみられる。

須恵器（第５～７図　図版15～17）



第5図　塚の原一号古墳出土須恵器

蓋坏の蓋（第５．１・２・３・４・５図、図版16）

単位はcm、出土地点番号は第４図参照

図番号	出土地点番号	口径	最大径	器高	深さ	胎土	焼成	色調	特徴
1	10	11.1	11.1	3.4	2.8	小砂粒を含む	良	灰黒	器面上部篦削り、上部凹凸多く、窯印の平行線がみられる。内面刷毛目調整、篦記号
2	5	11.4	11.4	3.5	2.9	小砂粒を含む	良	灰黒	器全面に篦削り
3	8	11.5	11.5	3.8	3.0	小砂粒を含む	良	灰黒	器面篦削り、上部凹凸が多く、二本の平行線篦記号がみられる。内面刷毛目調整
4	12	12.7	12.7	3.6	2.9	小砂粒を多量に含む	良	灰白	器面篦削り、仕上げはあまりよくない
5	4	13.5	13.7	4.3	3.8	小砂粒を多量に含む	良	灰黒	器面篦削り、上部に二本の平行線の篦記号がみられる。

蓋坏の坏（第５．６・７・８・９図、図版16）

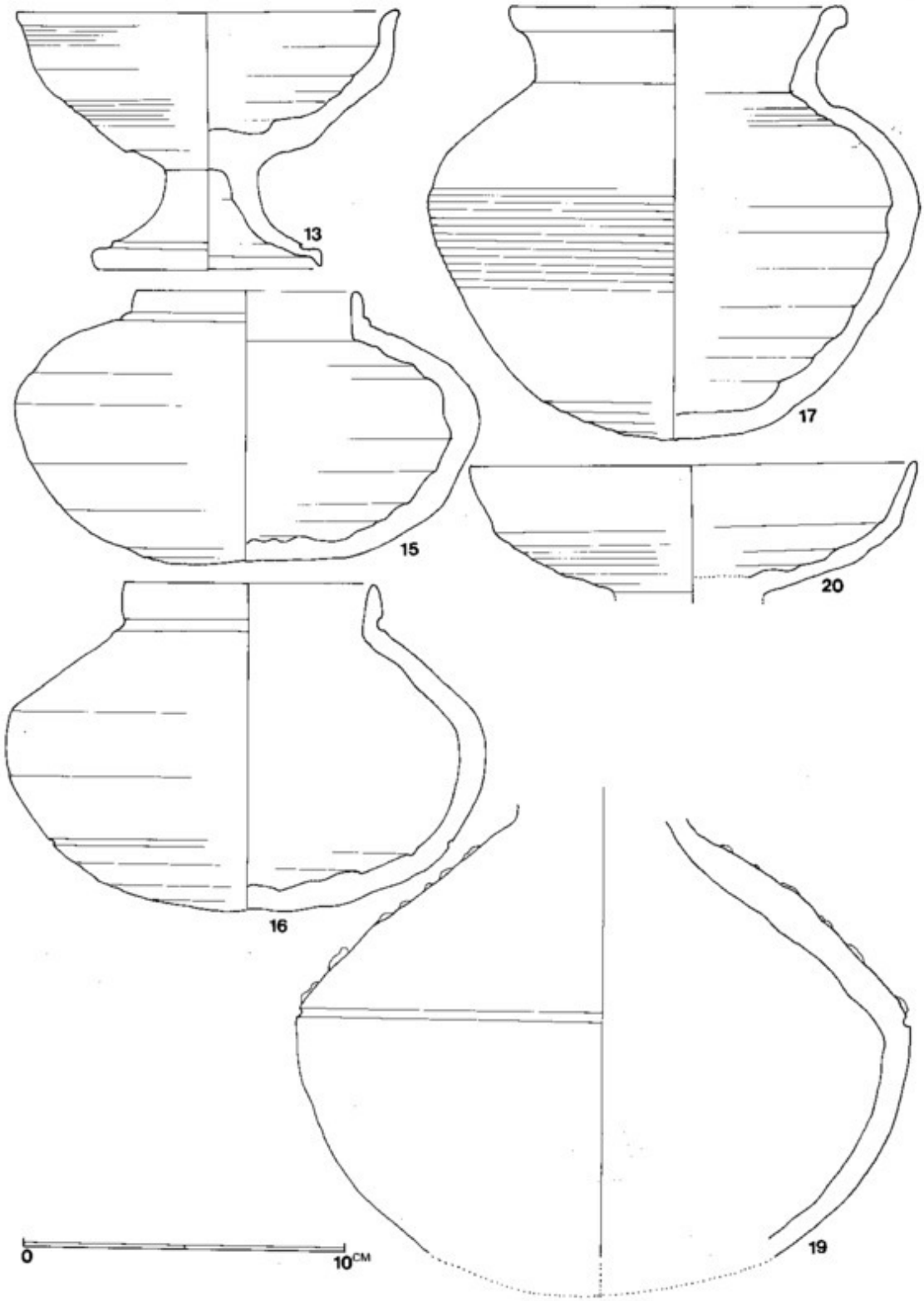
図番号	出土地点番号	口径	最大径	器高	深さ	立上がり 高さ	立上がり 内傾角度	胎土	焼成	色調	特徴
6	16	12.5	14.9	3.3	2.7	0.7	45°	小中砂粒多し	良	青黒	底部篦削り、器形にゆがみ
7	6	12.2	14.1	2.9	2.5	0.8	60°	小中砂粒多し	良	青黒	底部篦削り、器面に自然釉、器形にゆがみ
8	4	13.3	15.4	3.7	3.1	1.1	60°	小中砂粒多し	良	灰黒	底部篦削り、平底風
9		15.1	17.5	3.9	3.4	0.6	50°	小中砂粒多し	良	灰黒	底部篦削り

以上の蓋坏で、蓋は概して上部が扁平であり、あらく篦削りがみられる。最大径はほぼ口径にみられる。すなわち口縁部が開きぎみになっており、深さは浅い。坏は立上がりが低く、受口の傾斜角は60°前後になる。蓋の受部はやや外上方にのび先端は丸味がみられる。受部の上部には一条の凹線が施こされている。

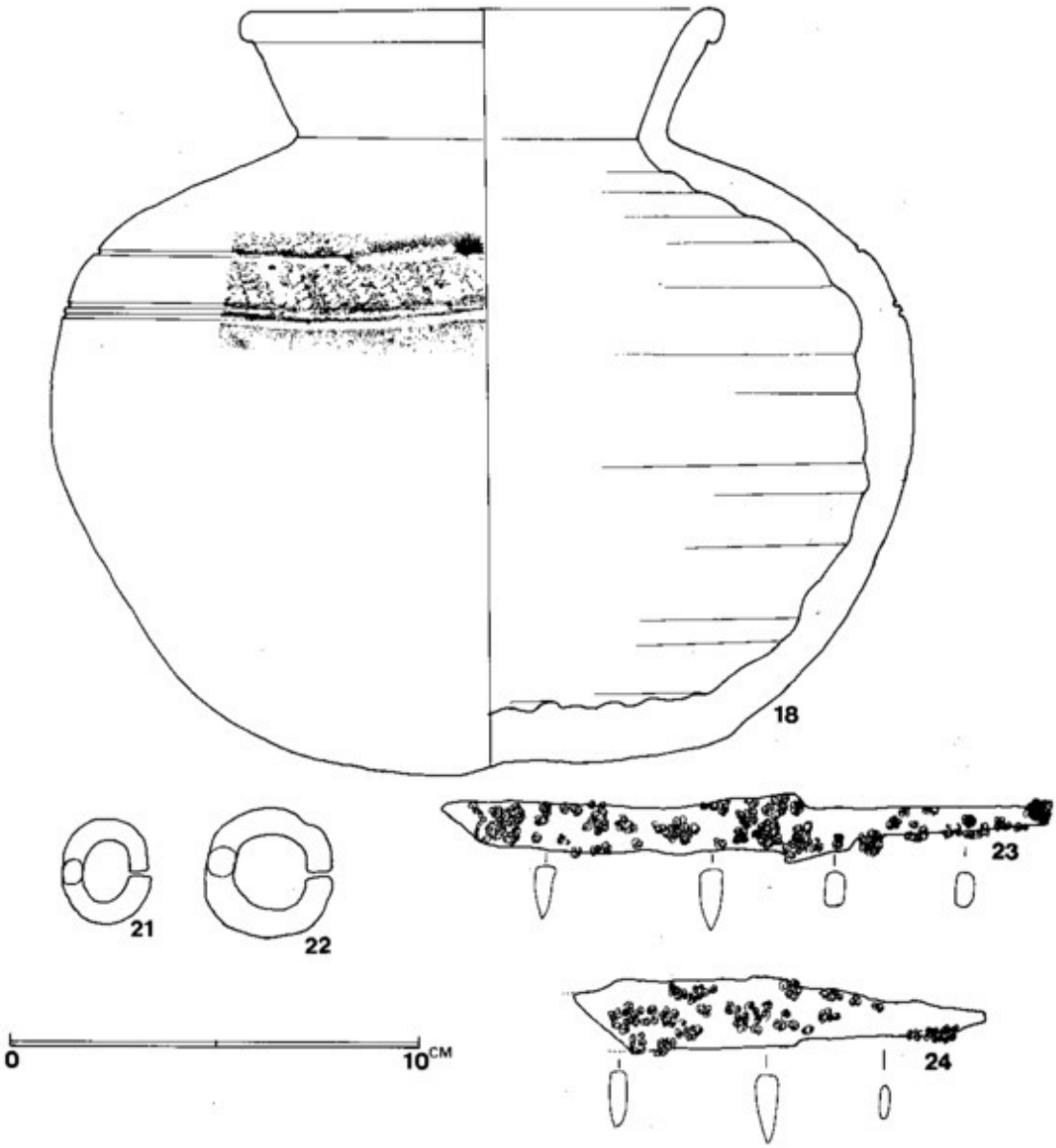
高坏（第５・６．10・11・12・13図、図版17）

図番号	出土地点番号	口径	器高 最高	器高 最低	坏部深さ	脚部 高さ	脚部 低径	胎土	焼成	色調	特徴
10	3	9.7	9	8	3.2	4.5	8	小砂粒を含む	良	灰白 脚部 灰黒	坏部は口縁部がやや外反し、口縁下に段が三段みられる。脚内面は篦削り
11		11	7.4	7.4	3.3	3	8.5	小砂粒を含む	やや良	灰白	坏部には篦削り、口縁部内傾脚部裾近くに一本の凹線帯
12	11	12	7.4	5	2.6	2.7	7.7	中小の砂粒を多量に含む	良	灰黒	器形にゆがみがみられる。口縁の一部が片口風になっている。坏の底に近い部分に脚との接合部があらく残っている。
13	7_B	11.9	8	8	3.7	3	7	小砂粒を含む	良	灰白	器面には篦削りがみられる

以上は玄室内出土の高坏である。これら高坏の器高は大体８cm前後のもので、高坏とし



第6図　塚の原一号古墳出土須恵器



第7図　塚の原一号古墳出土須恵器・装身具・鉄刀子

ては高さの低いものである。坏部はロクロ成形によるもので、口縁部は大きく外反している。ただ一個口縁部が内傾するものがある。概して焼成時のゆがみがみられる。脚部も低く脚上部の径は2.6cmと細く、そこから裾を大きく広げている。

埦（第5図　14）

口径12cm、器高は4.5cm、深さ3.7cmで口縁部はすこし外反している。中央部には二段に有段部がつくられ、その間に櫛状器具による刺突文がみられる。底部は篦削りにより平底風に仕上てある。底には×の窯印とみられる篦描き文がある。焼成は良く硬質で、灰黒色を呈している。

壺（第6・7．15・16・17・18・19図、図版18）

器形	図番号	出土地点番号	口径	最大胴径 表裏	最大胴径 左右	器高	口頸高	胎土	焼成	色調	特徴
短頸壺	15	1	8.2 6.8	14.7	14.3	8.9	0.8	小砂粒を多量に含む	良	灰黒	上からみれば口縁は楕円形。口縁では長径の方がやや上る。胴の最大径下は篦削りがみられる
短頸壺	16	2	7.6	14.7		10.2	1.2	小砂粒を多量に含む	良	青黒	肩部に最大径、胴下部はあらく篦削りがみられる。口頸部下に凹線帯がみられる
広口壺	17	9	10.3	15.2		13.5	2.2	中小の砂粒を含む	良	青黒	口縁は外反し、口唇部は丸味をもつ。最大径は胴上部にあり、そこには櫛描の平行線がみられる。胴下部は篦削り、尖底に近い底部である。
広口壺	18	15	11.3	20.9		18.5	3.1	中小の砂粒を含む	良	青黒 自然釉	口縁は外反し口唇部は丸味をもつ、胴最大径は中央部、胴上部に二本の凹線帯、その間に櫛状器具による刺突文がみられる。
台付長頸瓶	19	13		19				中小の砂粒を含む	良	緑 自然釉	肩部には焼成時の付着物がみられる。胴中央に最大径、その部分に凹線帯がみられる。

二個の短頸壺は短かい頸部と肩部の境いに凹線か隆帯がみられる。ともに胴下部は篦削りがおこなわれている。二個の広口壺は作りには大小はみられるが、口頸部の作りはにかよっている。小さい方は最大径が胴上部にあり、底部近くは篦削りがみられ、尖底にちかい。大形のものは胴・底部共に丸味をもつ、肩部から胴上部にかけて自然釉がみられる。器面に凹凸がみられ作りとしては、あまりよいものではない。

高坏（第6．20図、図版17）

石室前面のピット状遺構内から出土したものである。口径13.9cm・坏部の高さ3.8cm・深さ3.2cmで脚は欠損している。坏の底近くは丸味をもちながら外反するが中央部に段をつけている。それより口縁部には斜めに立上る。口唇部はやや丸味をもつ。焼成よく灰黒色

を呈し、胎土には小砂粒を含んでいる。

以上述べた一号古墳に副葬されていた須恵器は、土佐の古墳出土の須恵器の編年に照らせば、その第Ⅴ型式に属するものである。第Ⅴ型式の実年代は7世紀の前葉から中葉におよぶと推定される。（廣田）

4．二号古墳の調査

二号古墳の石室は、戦後開墾されてミカン山としたとき、すべて取りこわされていた。そのため遺構としては、古墳築造時の基底部にあたる掘り方が残っているのみであった。勿論副葬品の出土もなかった。(第８図、図版14・15)

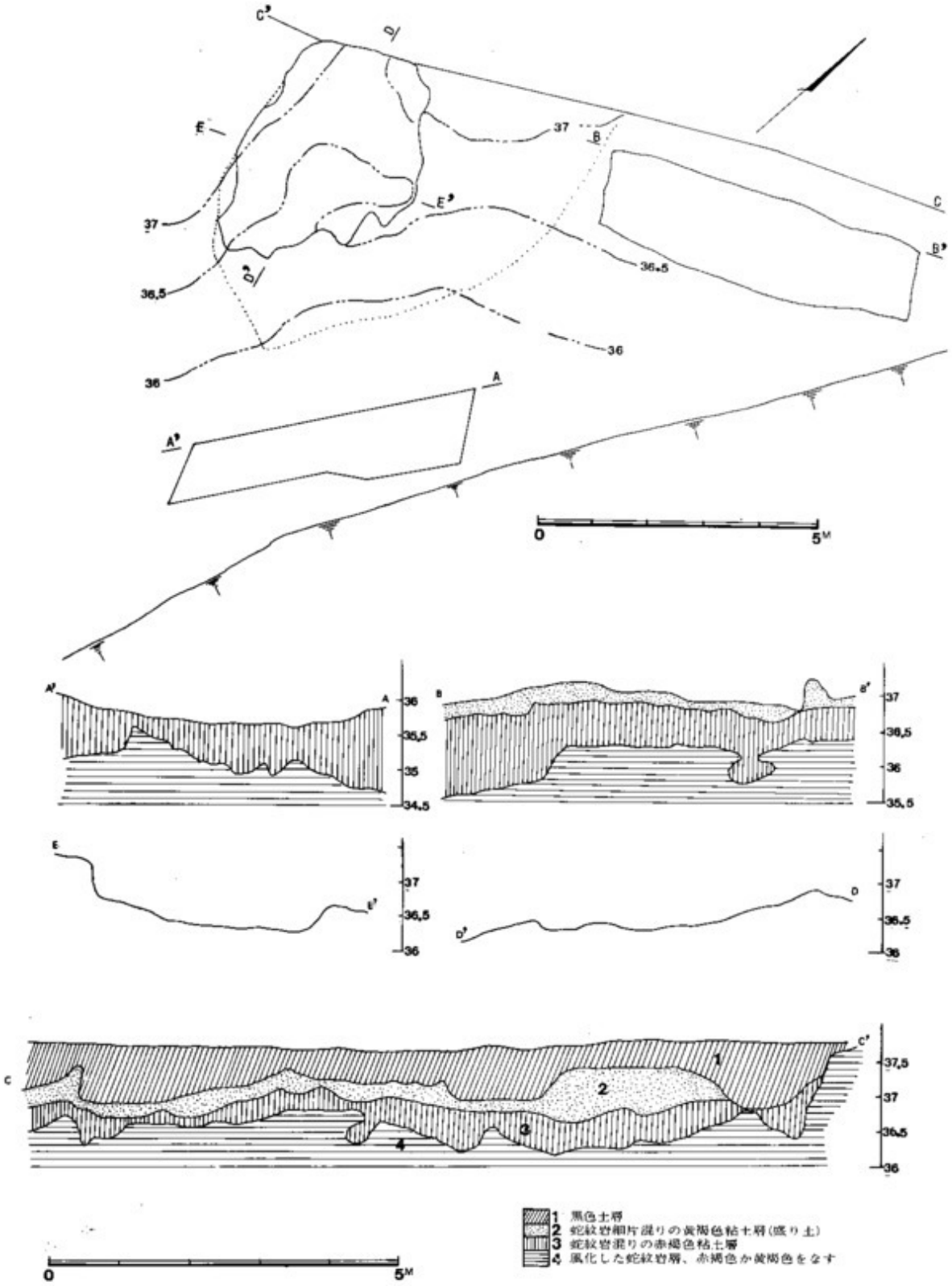
石室の掘り込みは、北から南に傾斜した自然の丘陵を利用して築いたものである。まず西側は表土の黒色土層があり，その下の第二層は風化した蛇紋岩層になっている。この自然丘陵では西側が一番高い標高を示している。この場所では蛇紋岩層を西側掘り込みの壁面として利用している。深さは表土から1.5m～２mほど掘り込んでいる。そしてこの丘陵は東と南に傾斜するが、ここでは第二層は蛇紋岩細片の混じる黄褐色土層、第三層は蛇紋岩塊混じりの赤褐色粘土層になり、第四層で風化した蛇紋岩層となっている。すなわち西側壁として利用した蛇紋岩層は、石室の中央部付近では第四層の土層と同じ層である。二号古墳の石室中央部付近では、第二層と第三層を掘り込み、第四層上部を石室の基底部としている。この部分では表土下1.5m程の掘り込みがみられる。

石室基底部の掘り込みの広さは、一番広い所で3.1m・長さは4.2mある。ほぼ長方形に近い掘り方である。そしてこの基底部は北から南にやや傾斜している。その高低差は50cmほどである。この掘り方から推定する石室の大きさは幅２m・長さ４m程度の玄室が推定される。おそらく横穴式石室をもつ古墳であっただろう。

次に石室の掘り込みから東南方向に9.5mはなれた地点に幅1.5m・深さ40cmほどのU字状の掘り込みがみられた。このU字状の掘り込みは二号古墳の周溝でなかったかとみられる。これが周溝とすれば、石室中央部から半径約10mの円墳の規模が考えられる。

次に石室の掘り込みの東側約２mの所に、幅1.3m・深さ0.5mのピット状遺構がみられたが、これは直接二号古墳に関係したピットではなかろう。おそらくミカン畑としたときの遺構と考えられる。

(廣田)


C'
D'
E
37
B
C
E'
37
36.5
D'
36.5
B'
36
36
A
A'
0
5M
A'
A
36
35.5
35
34.5
B
B'
37
36.5
36
35.5
E
E'
37
36.5
36
D
D'
37
36.5
36
C
C'
37.5
37
36.5
36
1
2
3
4
1 黒色土層
2 蛇紋岩細片混りの黄褐色粘土層(盛り土)
3 蛇紋岩混りの赤褐色粘土層
4 風化した蛇紋岩層、赤褐色か黄褐色をなす
0
5M

第8図　塚の原二号古墳

5．総　　括

A．先に宅間一之君が本古墳の成立を鏡川三角州の開拓期との関連をもって考えねばならないと説かれているが、これには拍手をもって賛同するものである。「和名抄」の郷名をもって6～7世紀代の古墳群を論ずるのは危険な面があるとも考えられるが、筆者は「和名抄」の郷の先駆的なものが6～7世紀には生じていたという観点に立ち、あえてこの危険をおかしてみたいと思う。先に宅間君によって挙げられた本古墳周辺の各古墳および古墳群は筆者の考えでは、それぞれ次の各郷の先駆的な集落に関連があると思われる。すなわち朝倉古墳群は朝倉郷、伊野町枝川古墳群は大野郷、そして福井古墳は高坂郷、秦泉寺・一宮の古墳群は土佐郷であろう。かかる立場に立つ時、塚の原古墳群は鴨部郷の前身の集落に関係するものと把握してよかろう。

鴨部郷に対して筆者は、それこそ鏡川の三角州を開拓し形成されたものとの解釈にたつ。鴨部郷の式内社郡頭神社は鴨部の津（港のこと）、鴨津に近い神社というところから、その名が生じたものと私考している。鴨津は鏡川の河口港ないし、それに近い港であったろう。

塚の原古墳群は鴨部郷の前身たる古代農村の小豪族によって形成されたと考えてよかろう。

B．本古墳群の一号古墳からは、墳丘裾を明確にするための周溝（幅約1m、深さ20～30cm）が発見され、羨道口に径70cmの円形土壙が発見された。墳丘裾を明確にするための周溝は、高知県では早く南国市岡豊町舟岩6号墳から発見されていた。舟岩6号墳の場合も周溝の幅は1m程度であった。いずれにしても、今後本地方の後期古墳の発掘については、その周溝の有無、そしてその有無が如何なる条件によって生じるか追求しなければならない問題である。

羨道口から離れて南1mの地点より発見された円形土壙は、その位置からしても墓前祭祀のためのものである。土壙の周辺に3個の栗石が置かれ、土壙内には須恵器高坏をキーリングして、その残存である坏部だけしか発見されなかった。この1個の高坏坏部は、伏せた状況で出土している。このような出土状況からみると、土壙を掘り須恵器をキーリングして、伏せた状態にして墓前に埋める行為は、墓前祭祀といっても非常に呪術的なものであると言わねばならない。そして死者を葬り、羨道を閉じ、墓前での祭祀の一つとして土

壙を掘り、高坏をキーリングし、さらにそれを伏せる行為がなされたと考えるのが順当であろう。

さてこのような墓前祭祀が、古墳時代後期における南四国一般の風習であったかどうかも今後において検討すべき問題点である。ただ最近報告された南国市蒲原山東二号古墳では、羨門の南やや東よりから発掘された須恵器広口壺があるが[1]、これなど出土遺構は判明していないが、これなど塚の原一号古墳と同様の墓前祭祀のものと考えてよくはなかろうか。ただこの場合注意すべきことは、蒲原山東二号古墳では広口壺であり、それがキーリングされていない点など、同じ墓前祭祀でもそのやり方に古墳によっては違いがあるのかもしれない。

C．本古墳群は２基からなる古墳群で、古墳群としては最小単位のものである。そしてこのような最小単位ないしはそれに近い３基からなる古墳群は、南四国では最もありふれた古墳群である。もちろんここで古墳群として取りあげているのは横穴式石室を持つ後期古墳である。南四国では十数基以上からなる古墳群は皆無ではないが、その数は２～３を数えるにすぎない。ここに南四国における後期古墳時代の階層の分化の不充分さがあり、また成立した古代家父長家族の力の弱さを示している。しかもたとえば本古墳群のように「和名抄」における鴨部郷の地域内における後期古墳はこの２基以外には存在しない。これはこの地域の後進性を物語るし、あわせてこの地域の歴史の浅さを示す。このような状況とまったく同じ傾向を示すものとして、３基からなる枝川古墳群を挙げることができる。

２基からなる塚の原古墳群も３基からなる枝川古墳群も、その共通点として出土遺物中から馬具はまったく発見されていない。発見されていないのではなく、盗掘その他の条件によって馬具は消失してしまったのであるとの反論もあろうが、塚の原一号古墳の出土地点や出土状況からみて当然馬具が副葬されておれば、馬具は出土するはずである。同様のことは枝川古墳群の１号墳[2]でもいえることである。よって筆者は塚の原古墳群も枝川古墳群も、はじめから馬具は副葬されてない古墳群といえよう。

廣田典夫君によれば本古墳群の年代は、出土の須恵器から７世紀前半から中葉にかけてのものとされている。また筆者が発掘した枝川古墳群もだいたいそれに近い年代である。この年代に成立する古墳群、そしてそれも２～３基からなる古墳群はほとんどといってよい程、このように馬具を副葬しないものが多い。

これに対し高知市朝倉宮の奥古墳のように、古墳群を形成せず単独の大形の古墳は馬具を持つものが多く、なかには飾馬のための馬具を副葬することもある。かつて筆者は南四国の大古墳群（20数基からなる）たる南国市舟岩古墳群を調査して、馬具の出土によって

各古墳を身分的に3階層にわけた[3]。すなわち飾馬のための馬具を持つもの、普通の轡だけの馬具を持つもの、そしてまったく馬具を持たないものである。これは馬具の有無およびその種類によって被葬者の身分差を追求したわけである。

このような観点にたつと、塚の原古墳群の被葬者はその力の弱いものであり、まだその支配者としての伝統もないものと把握してよかろう。このことは枝川古墳群においてもまったく同様である。かつて塚の原古墳群のあった鴨部郷と枝川古墳群のあった大野郷が、ともに天平勝宝四年（752）に東大寺の封戸になる[4]のも6～7世紀代におけるこれらの地域の後進性と歴史の浅さによると考えてはいけないだろうか。（岡本）

註

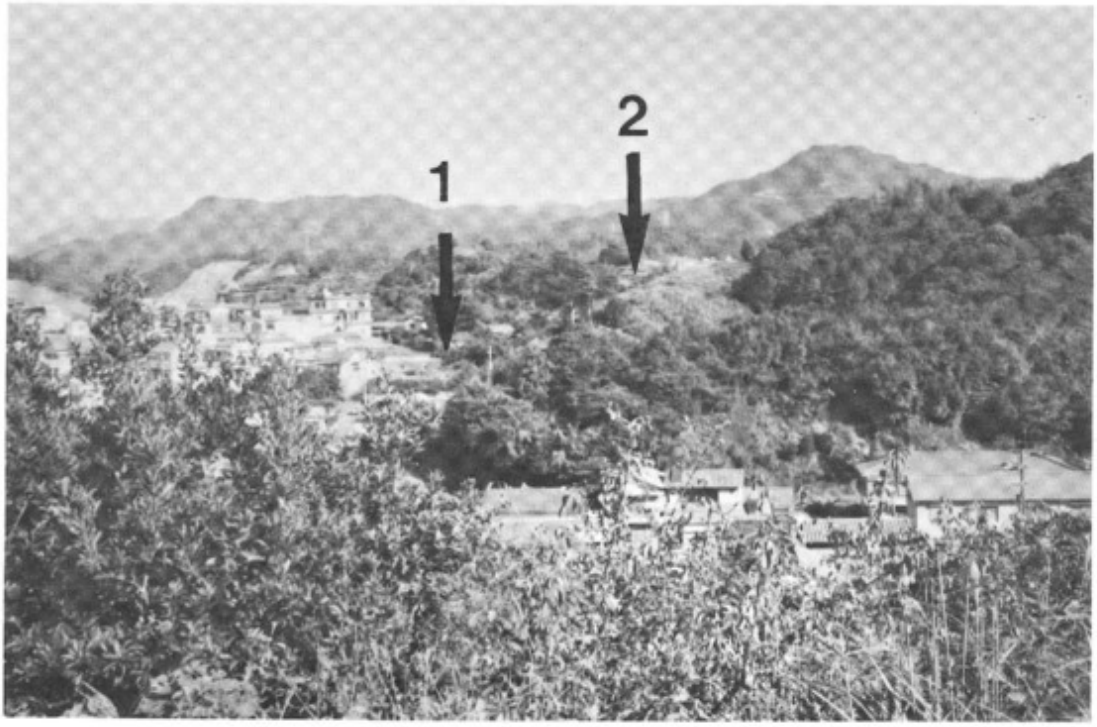
(1) 廣田典夫「南国市蒲原山東一号・二号古墳の調査概報」高知県文化財調査報告書第22集　昭和54年3月

(2) 片岡鷹介「伊野町枝川一号墳出土の遺物」土佐史談124　昭和44年11月

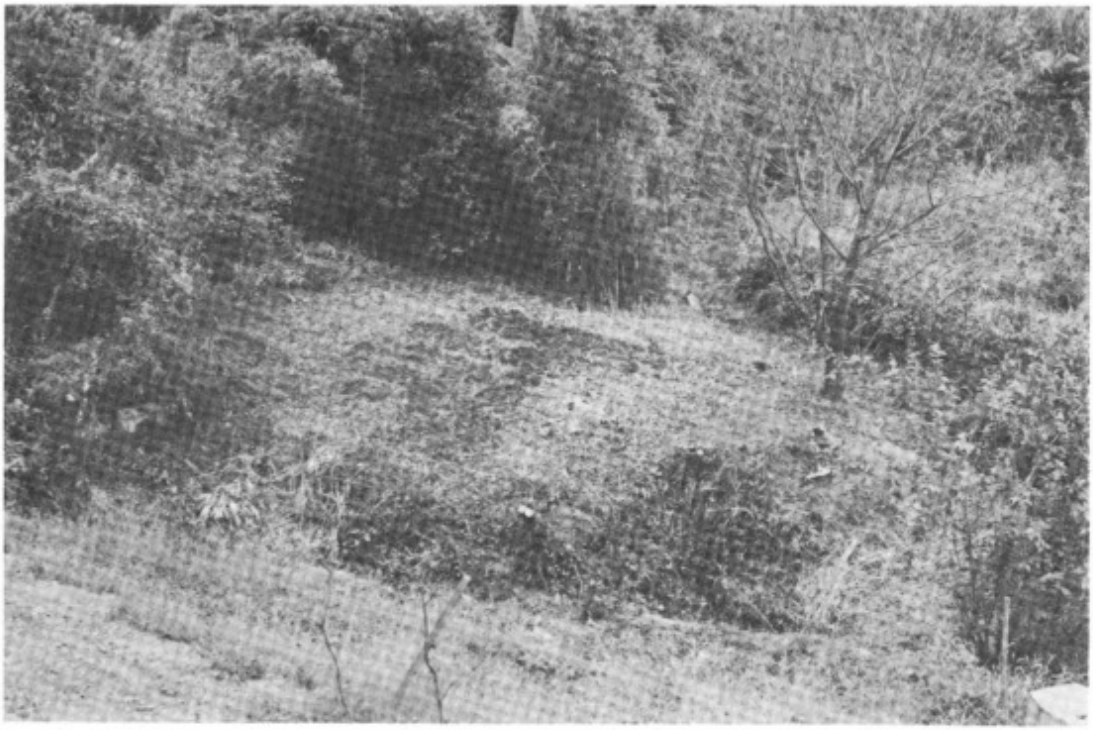
(3) 岡本健児『舟岩古墳群とその調査』高知県文化財調査報告書第15集　昭和43年3月

(4) 前田和男「土佐の封戸について」『土佐古代史の研究』昭和50年7月

図版 1

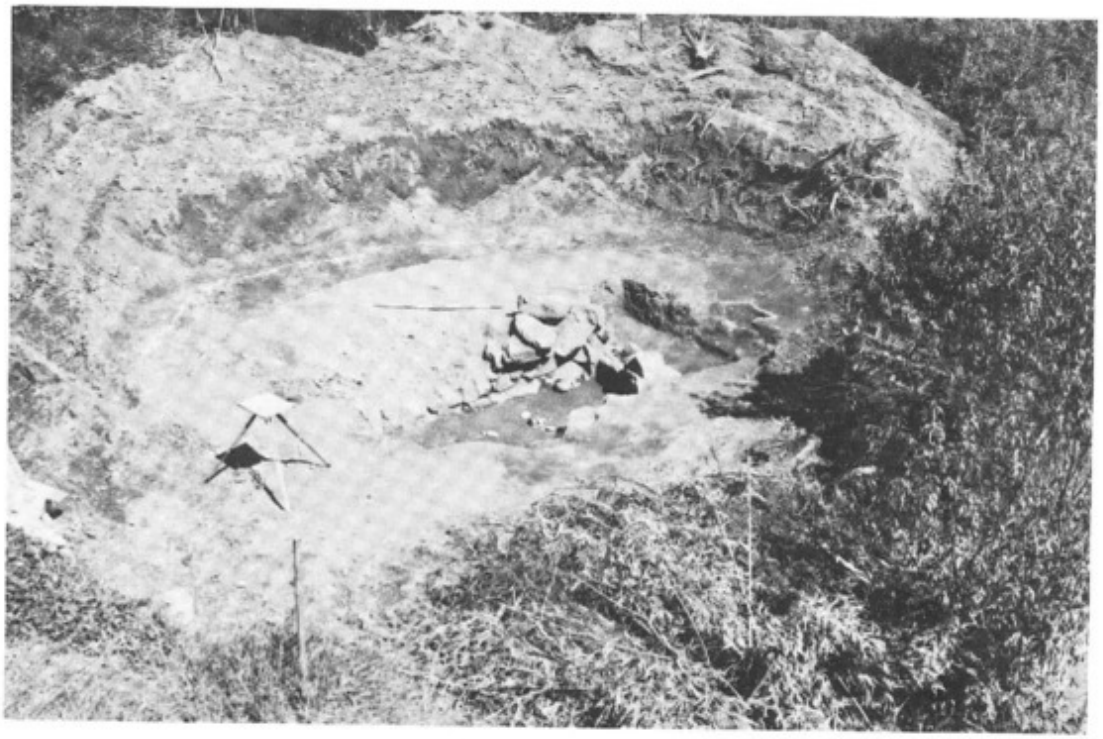


古墳群遠景（1－一号古墳　2－二号古墳）



一　号　古　墳（発掘前）

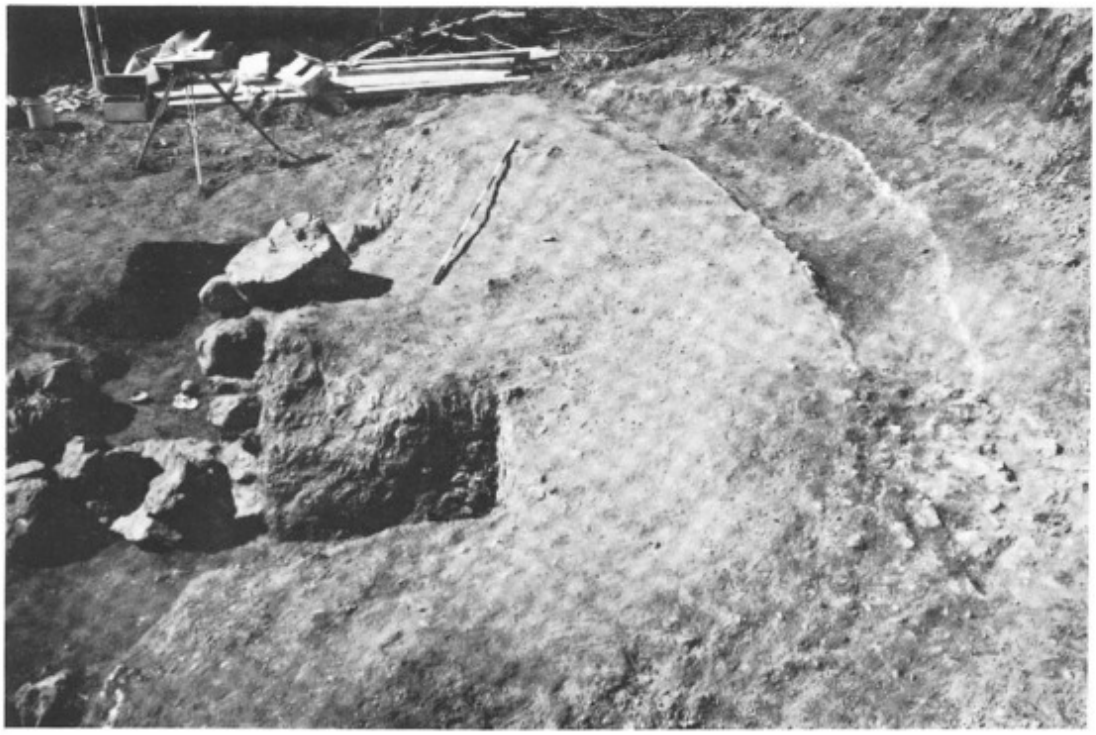
図版2



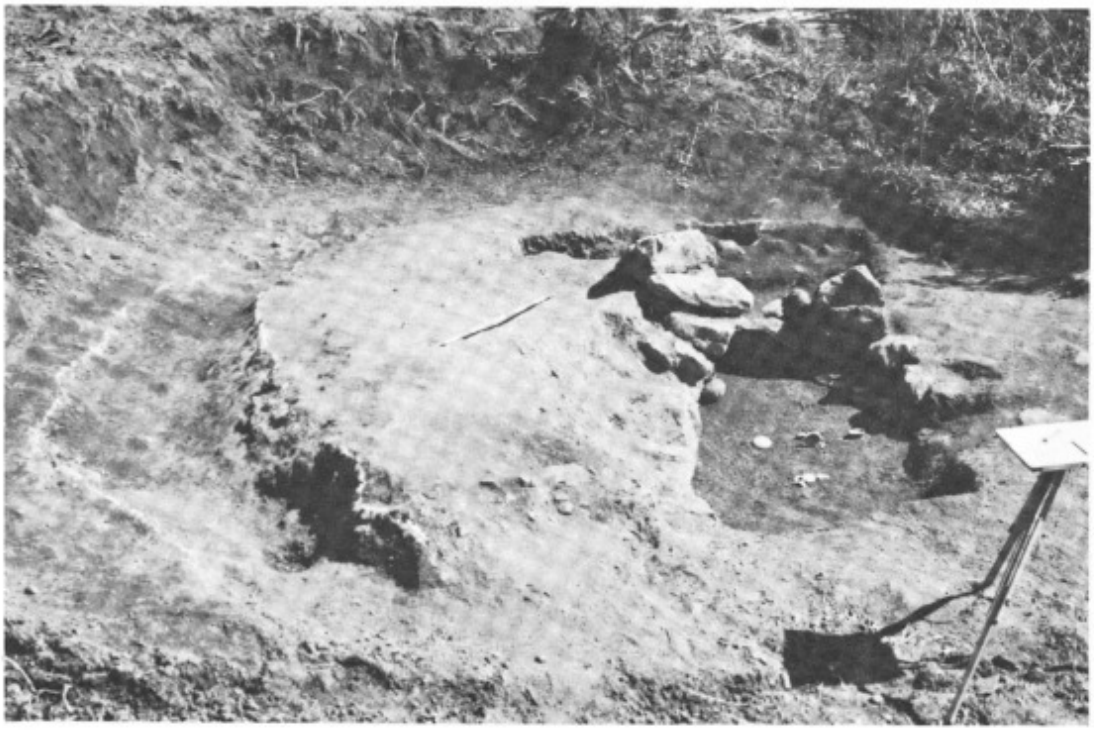
一号古墳発掘全景その1

一号古墳発掘全景その2

図版3



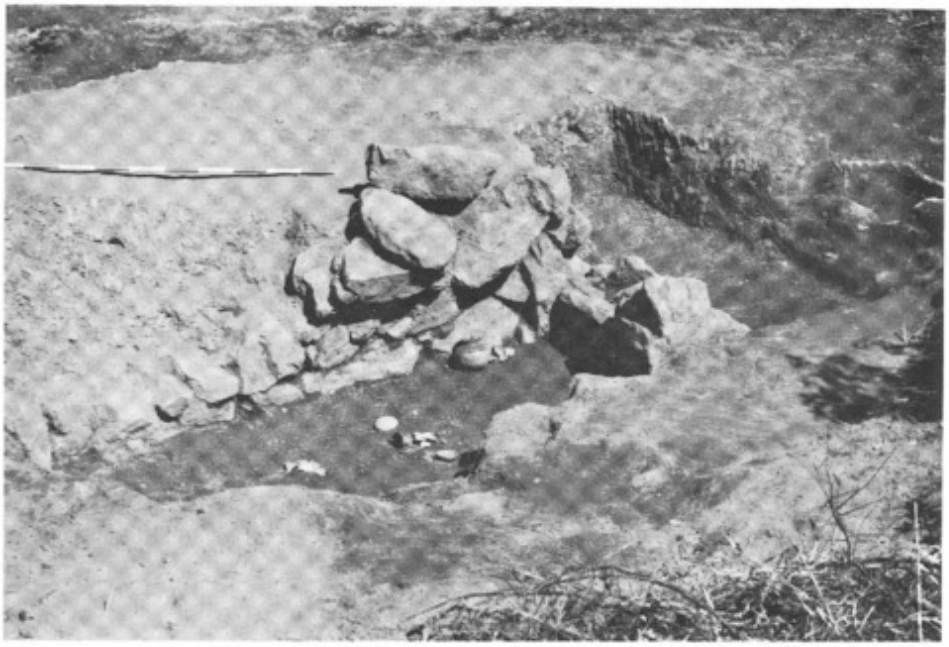
周　　溝（南より）



周　　溝（北より）

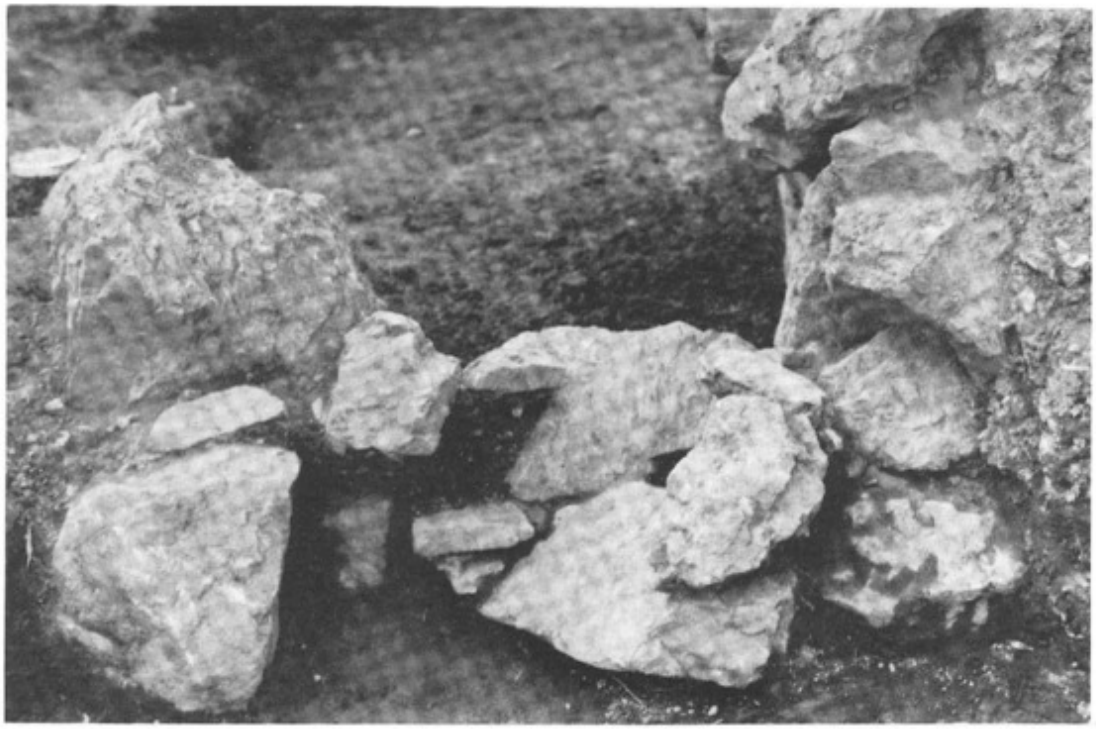
図版4

石室構造
その1

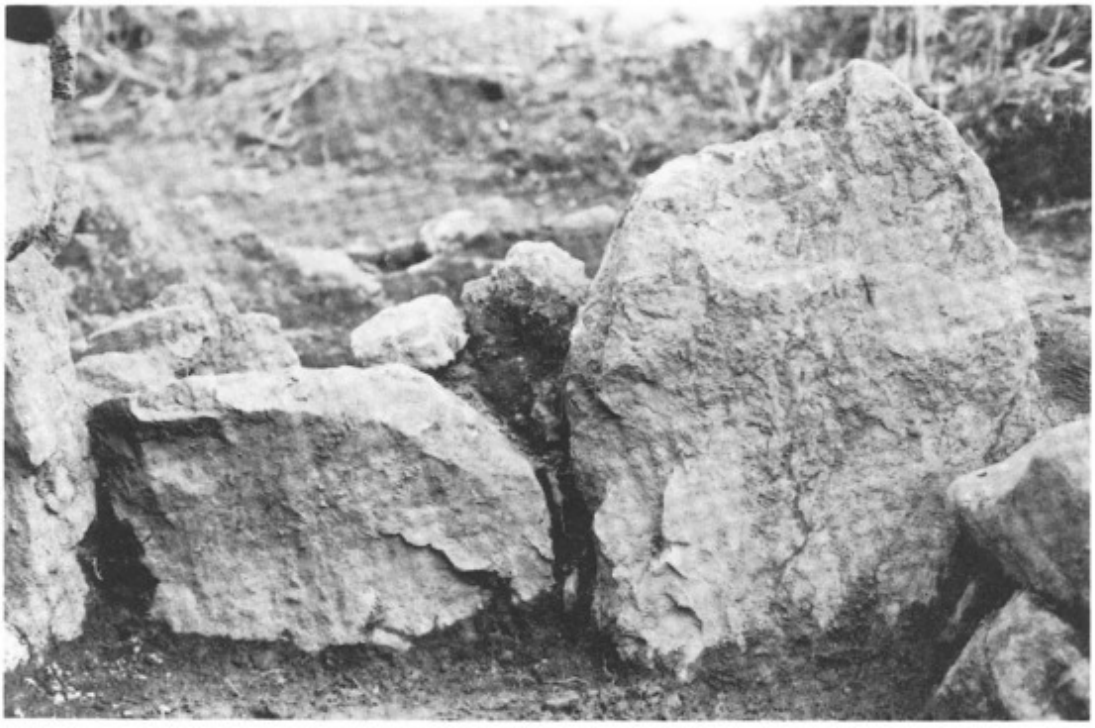


石　室　構　造　その2

図版 5

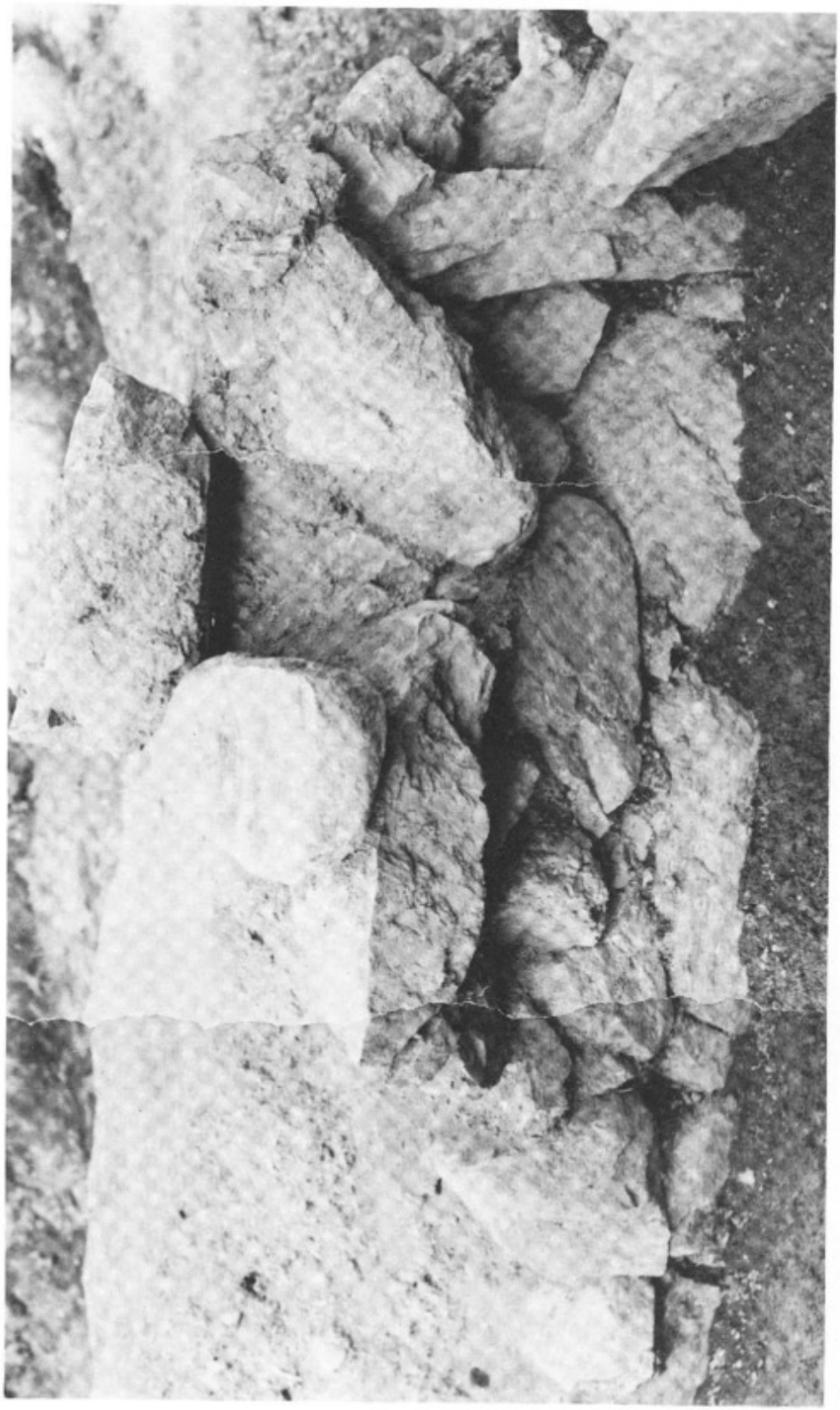


羨道・玄室の仕切石（羨道より）



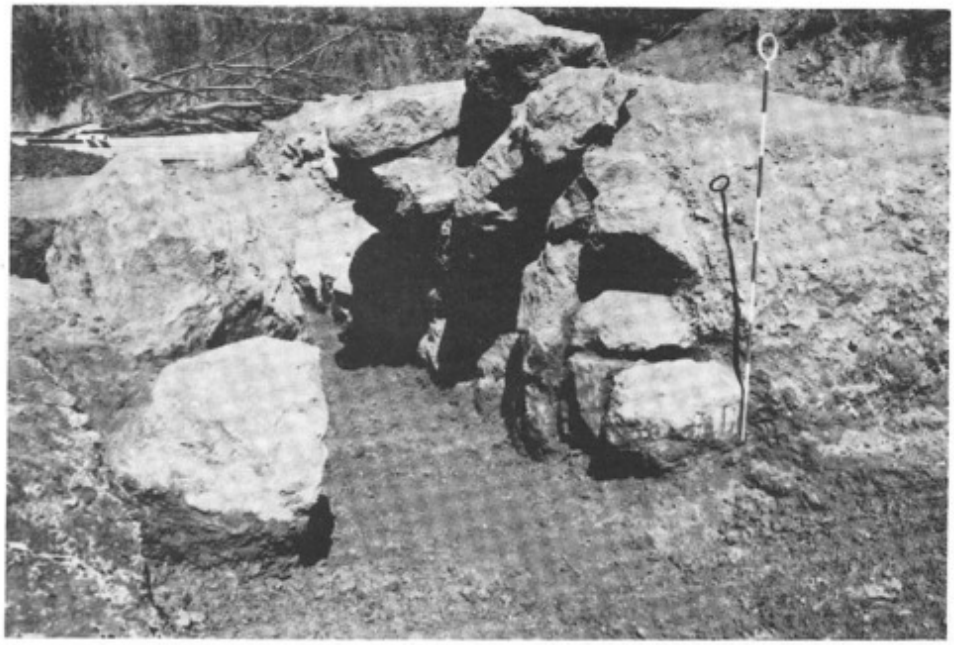
羨道・玄室仕切石（玄室より）

図版 6

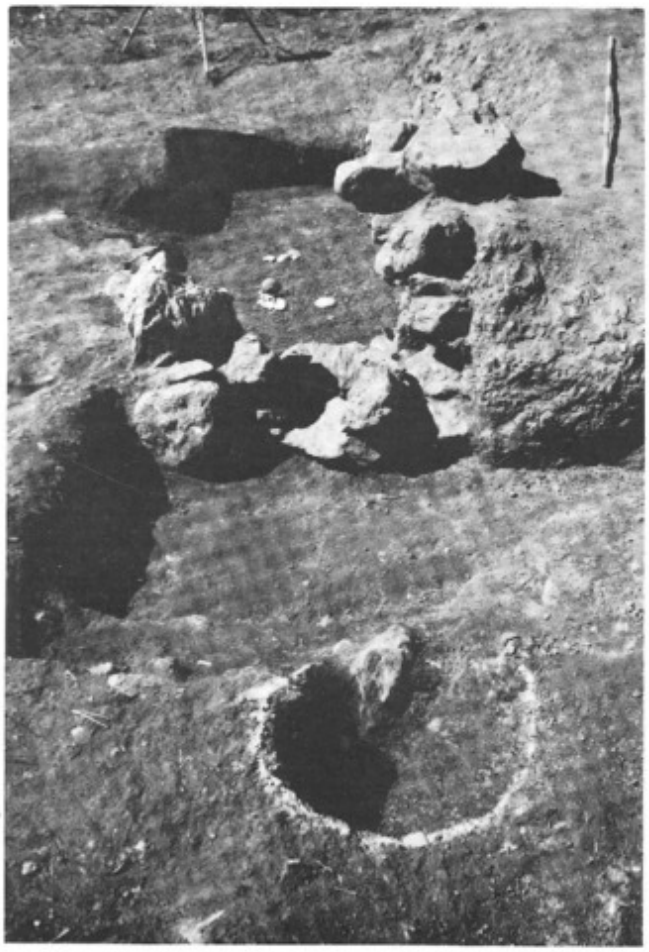


玄室東壁

図版7

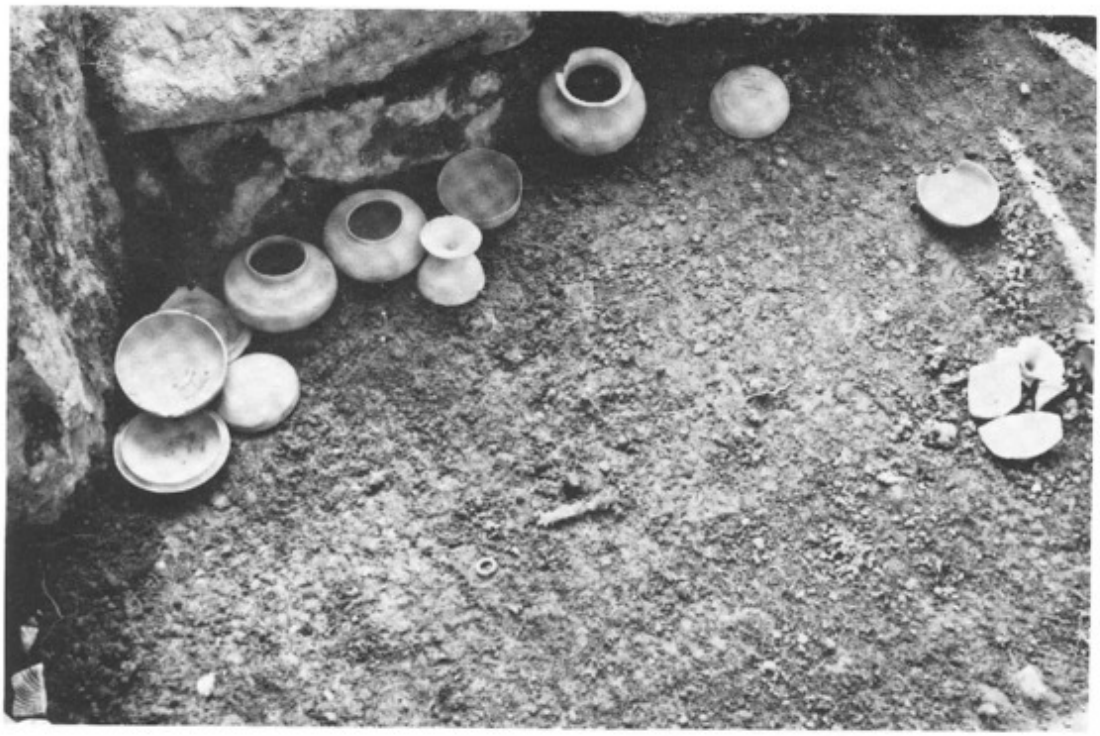


羨道より玄室を望む

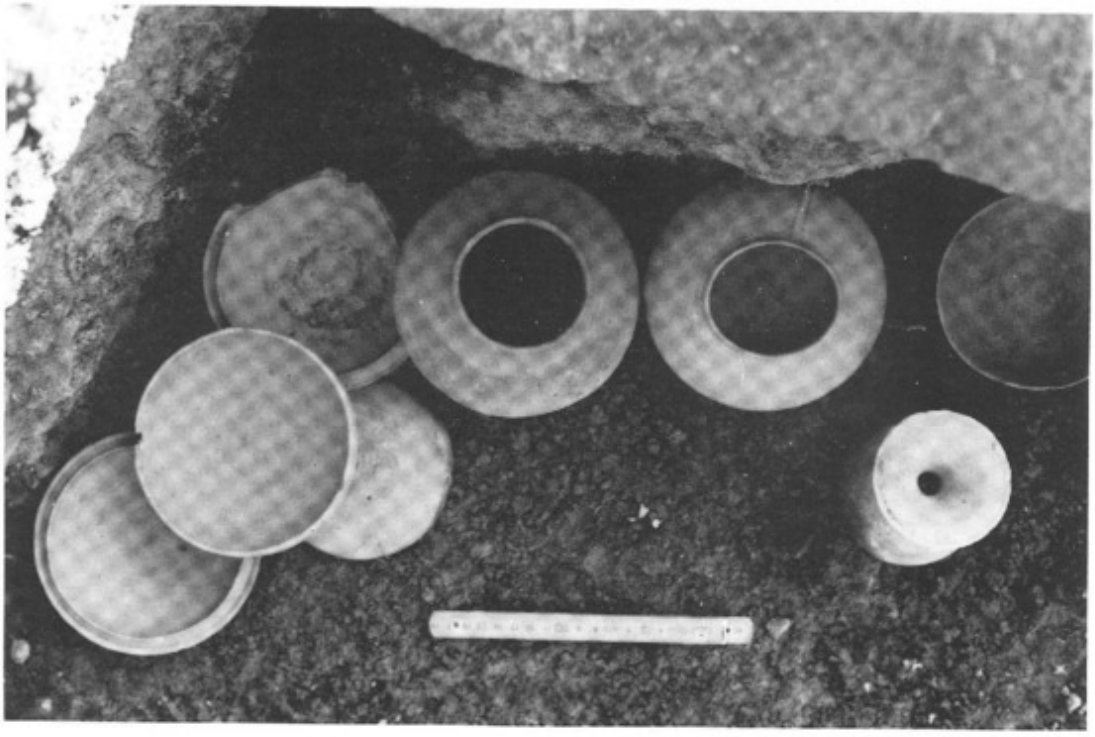


玄室・羨道と墓前祭祀ピット

図版8



遺物出土状態　その1



遺物出土状態　その2

図版 9

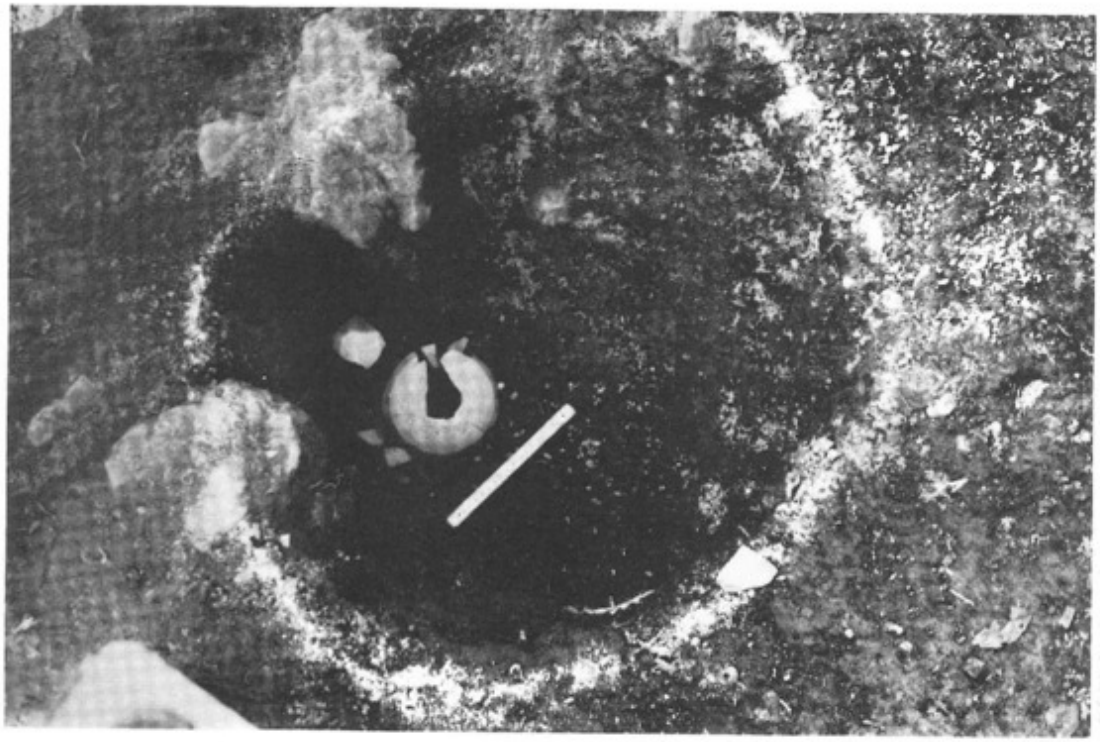
遺物出土状態

その 3

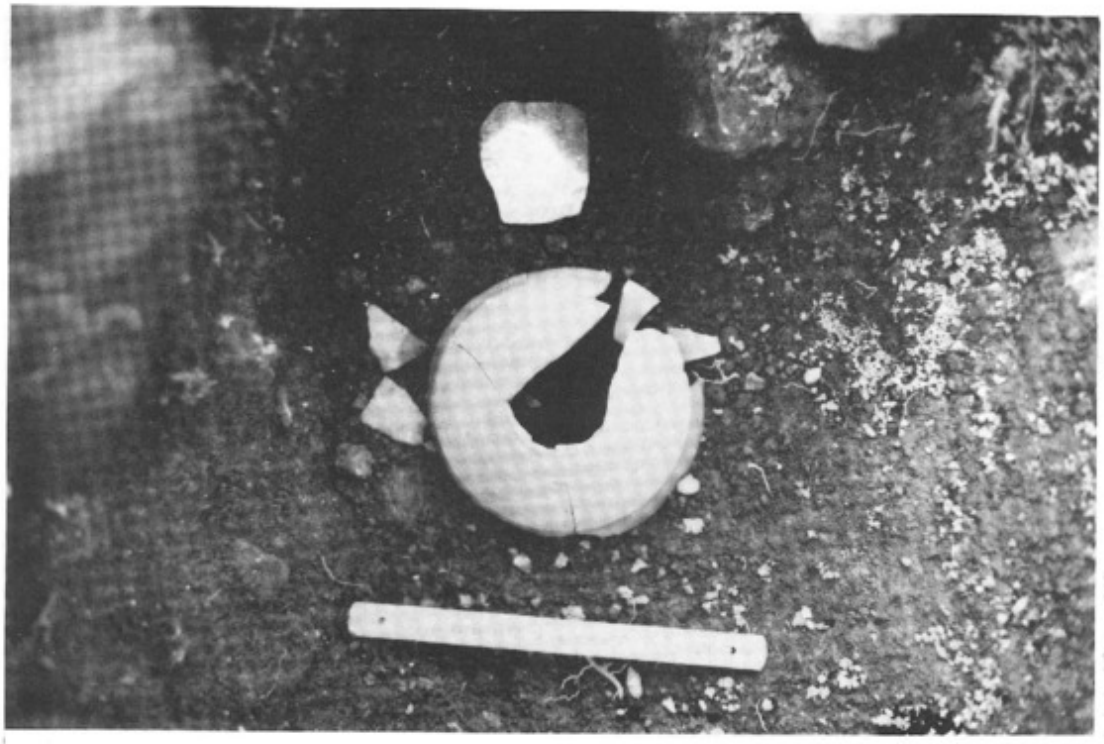
遺物出土状態

その 4

図版10

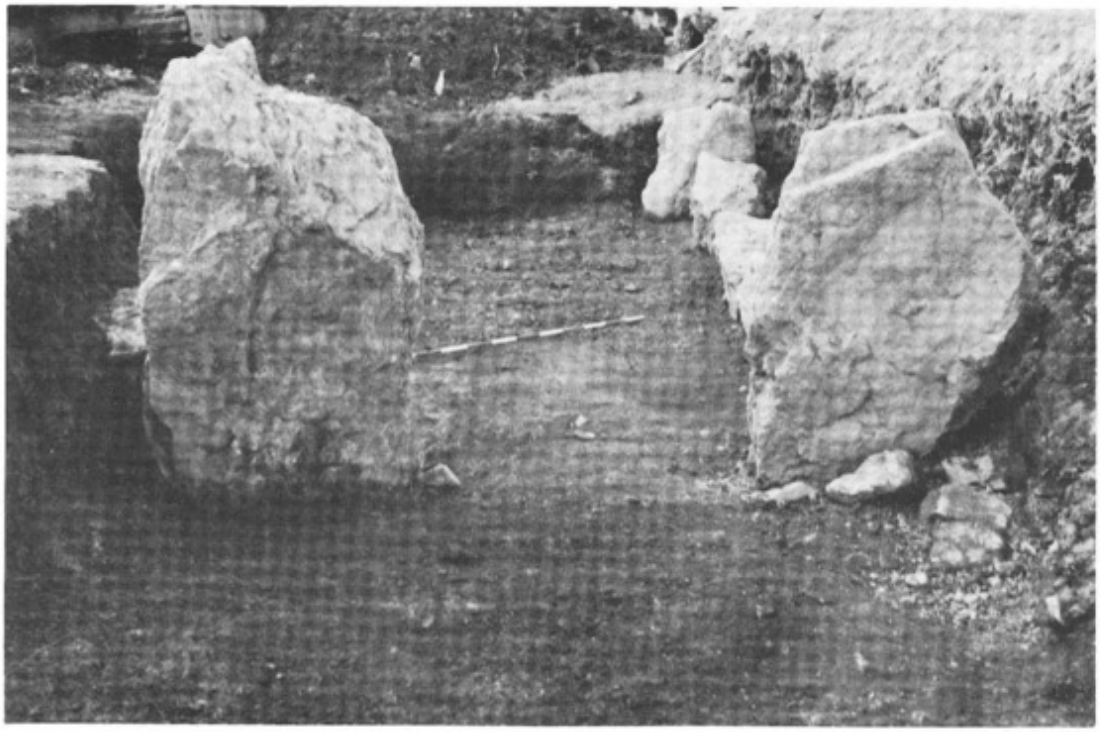


墓前祭祀ピット状遺構内部　その1

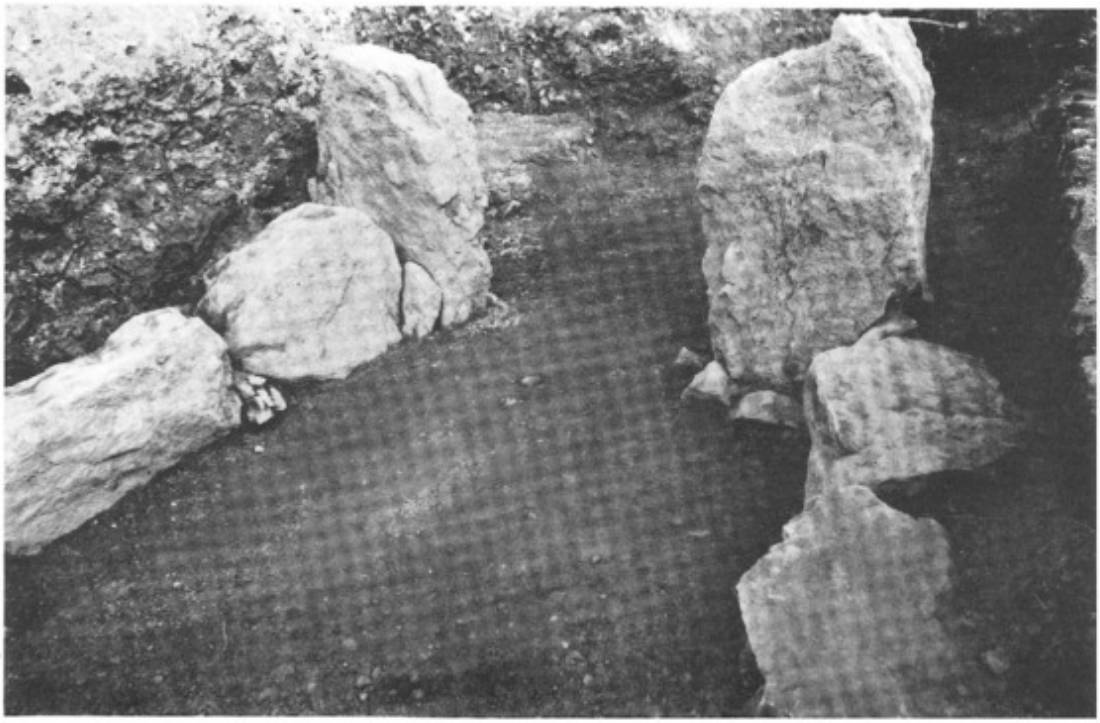


墓前祭祀ピット状遺構内部　その2

図版11

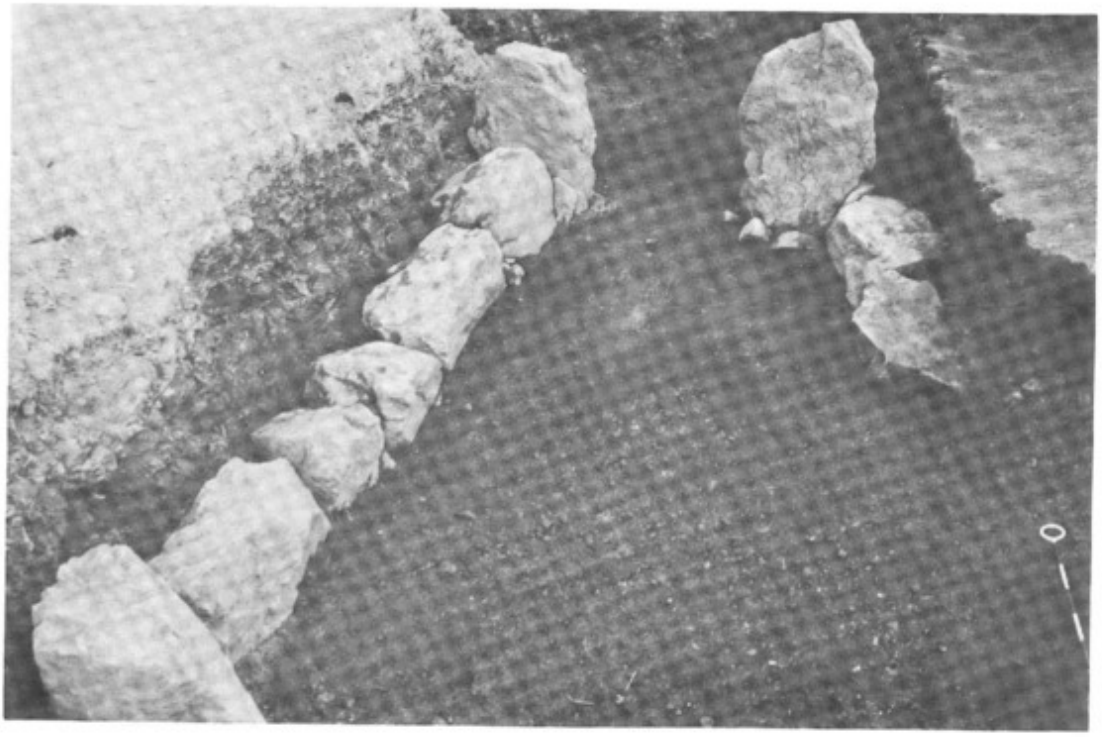


玄　　門　　部（南より）

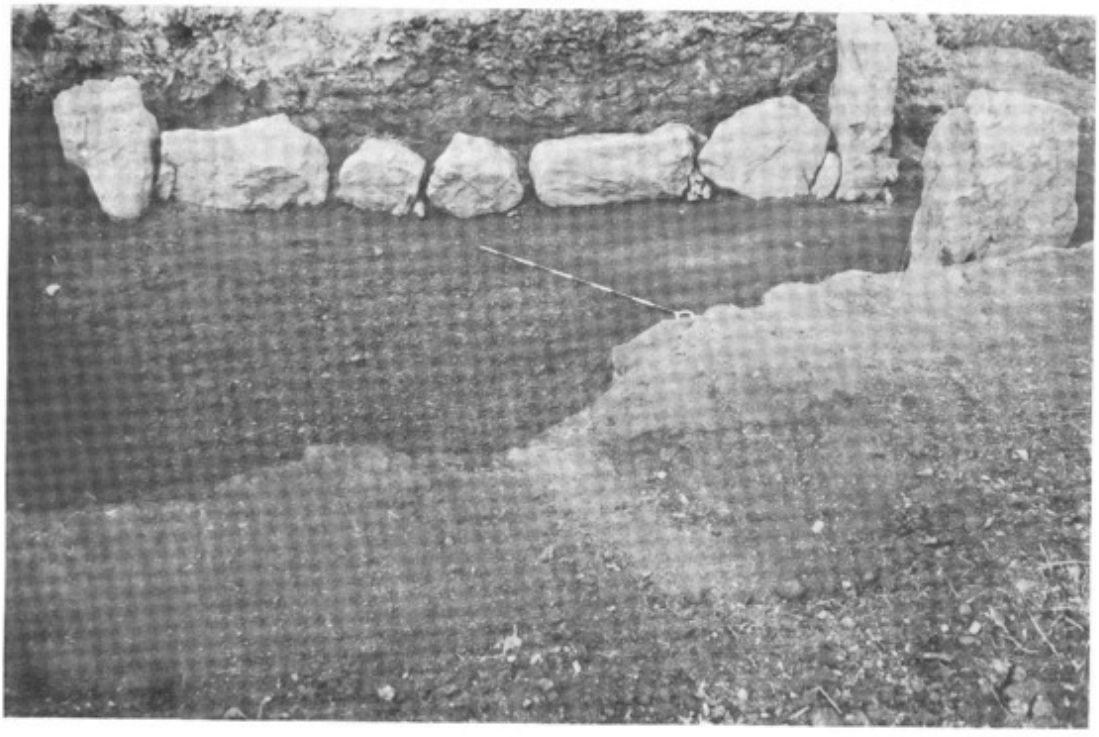


玄　　門　　部（玄室より）

図版12

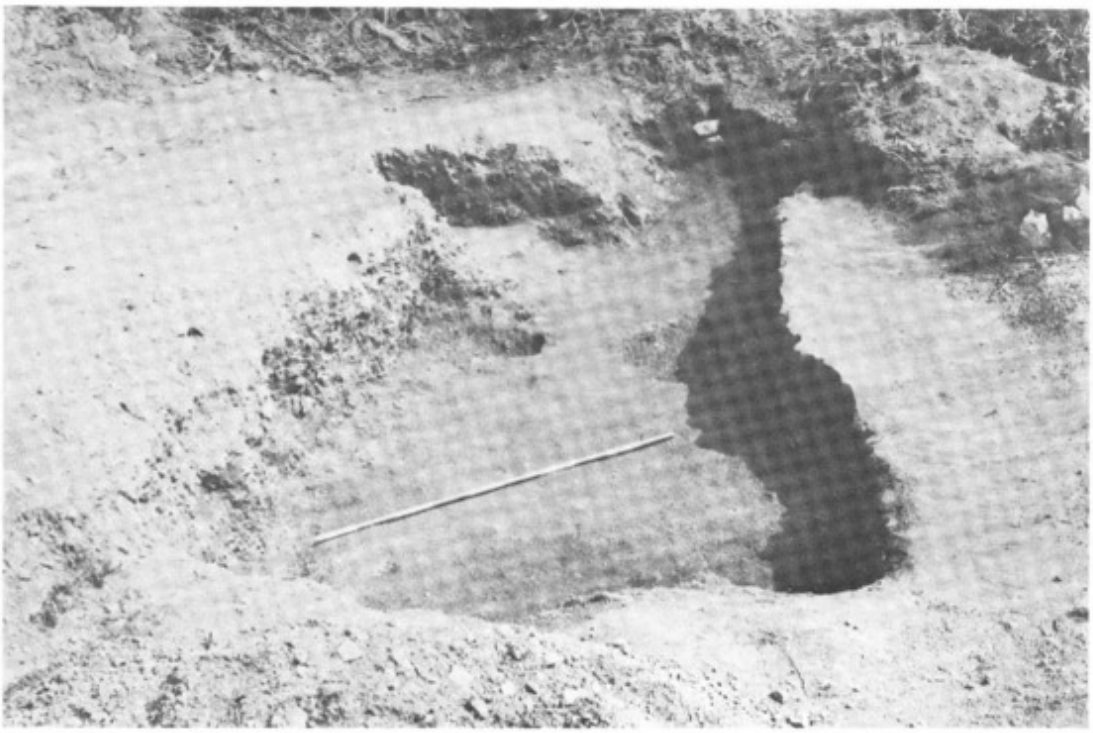


玄室東壁根石　その1

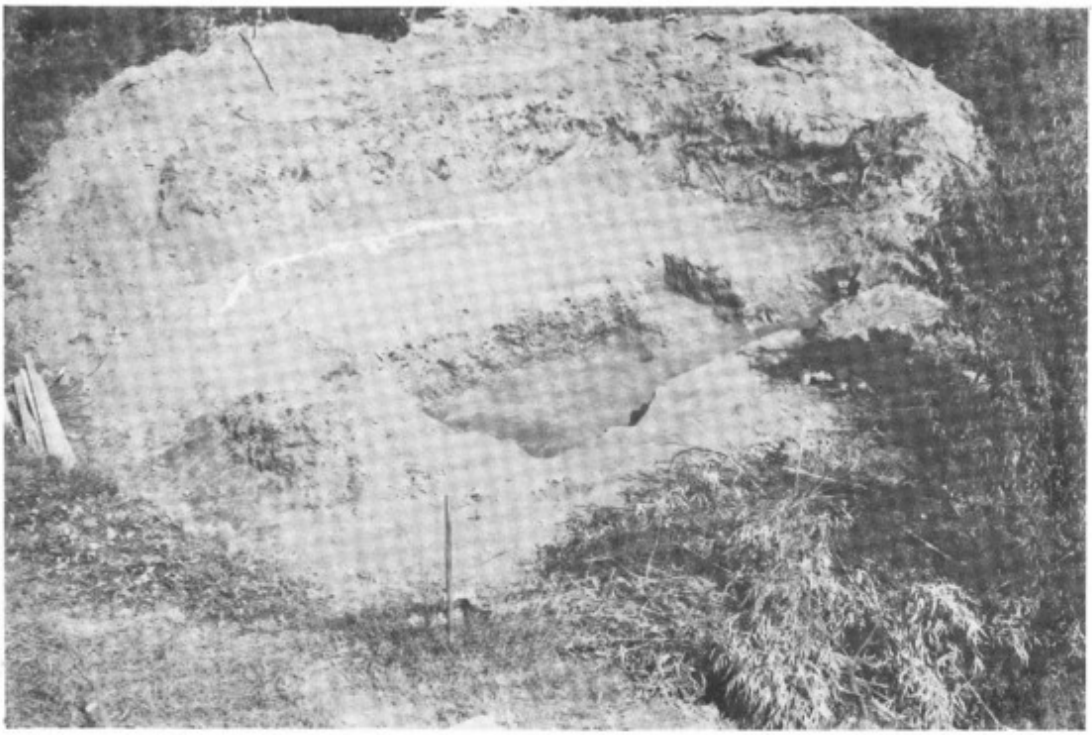


玄室東壁根石　その2

図版13

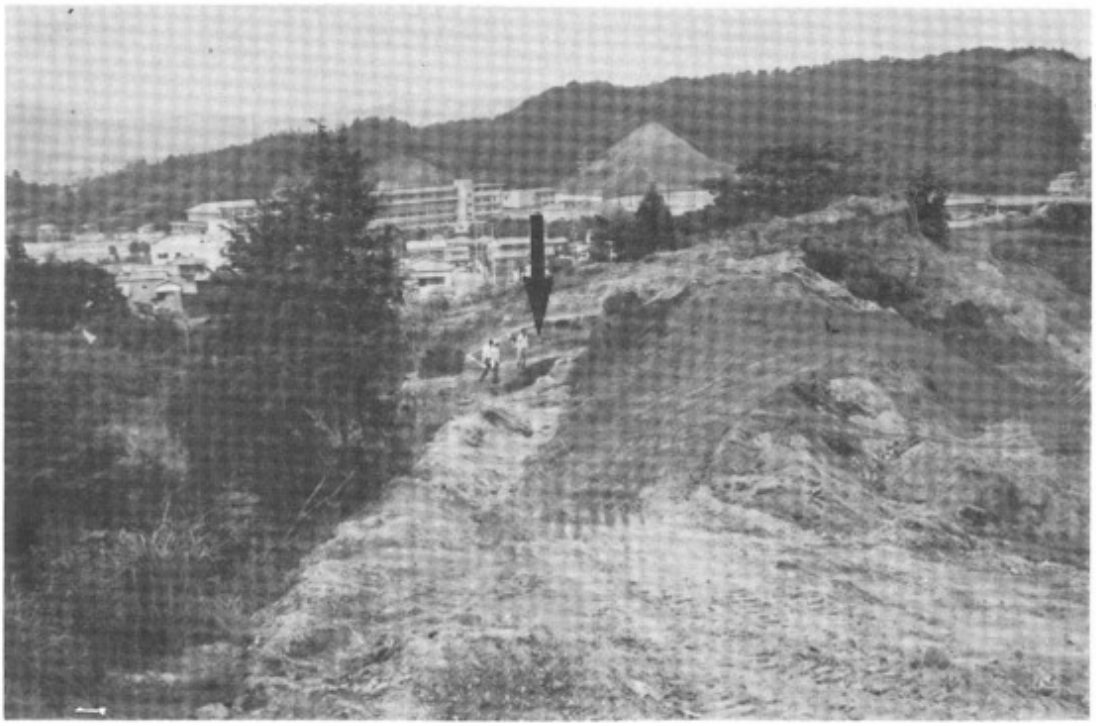


調査終了の一号古墳

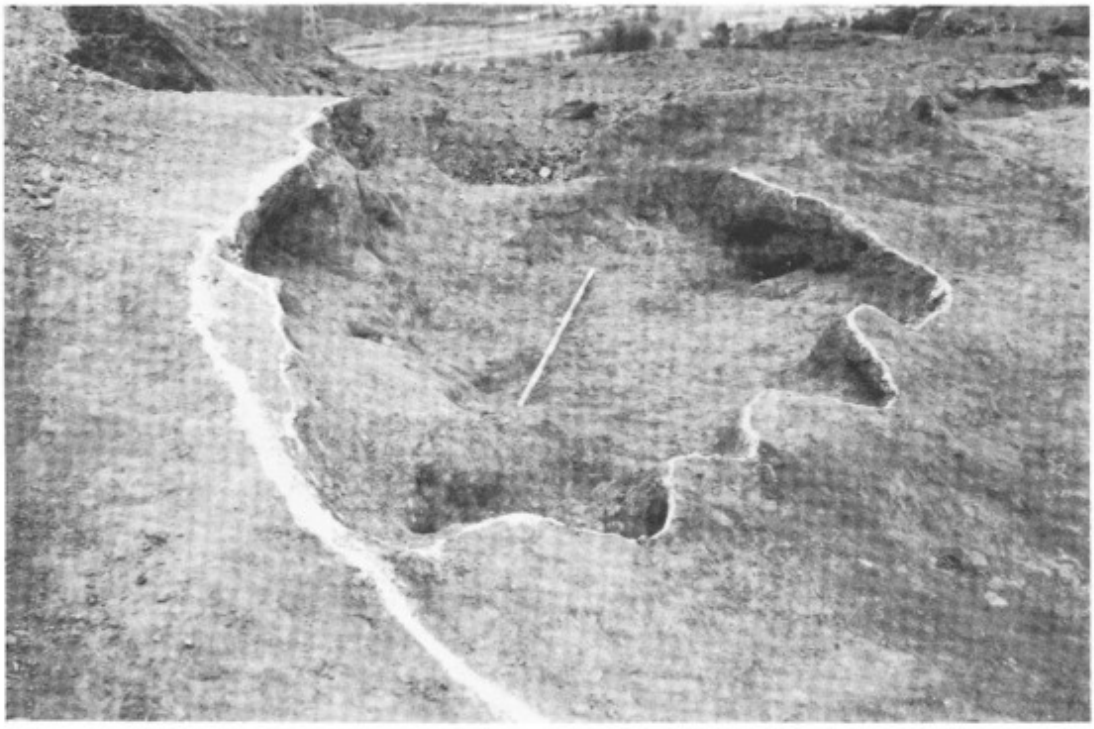


調査終了時の一号古墳全景

図版14

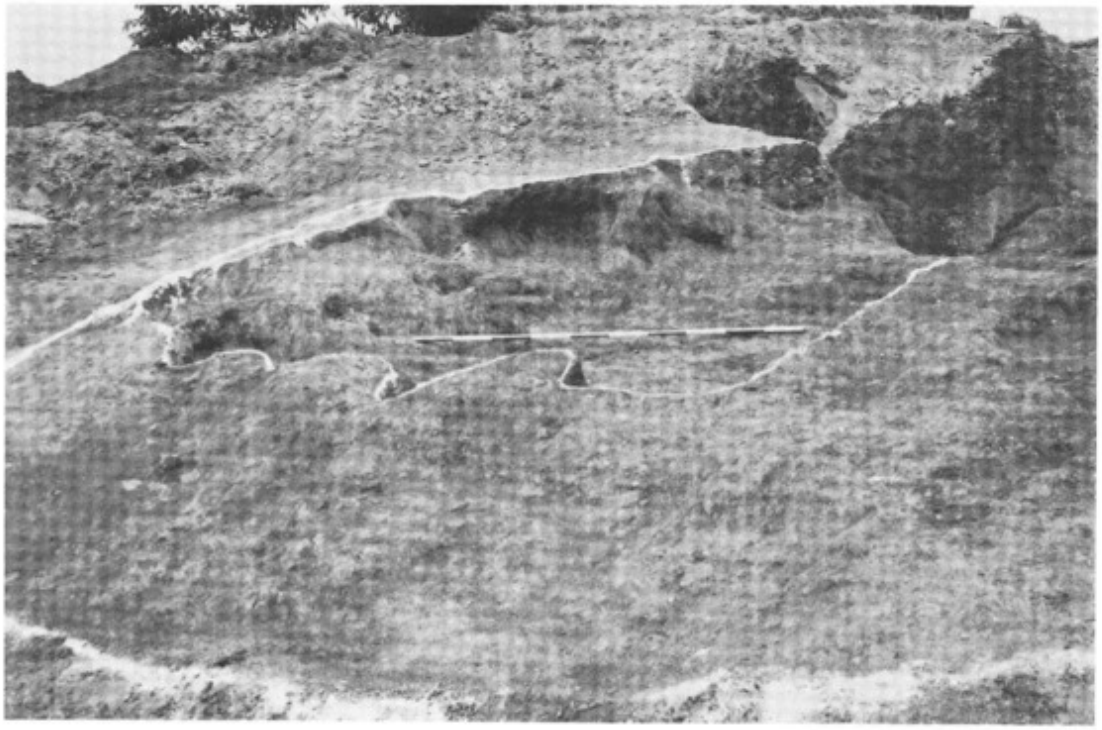


二号古墳所在地周辺

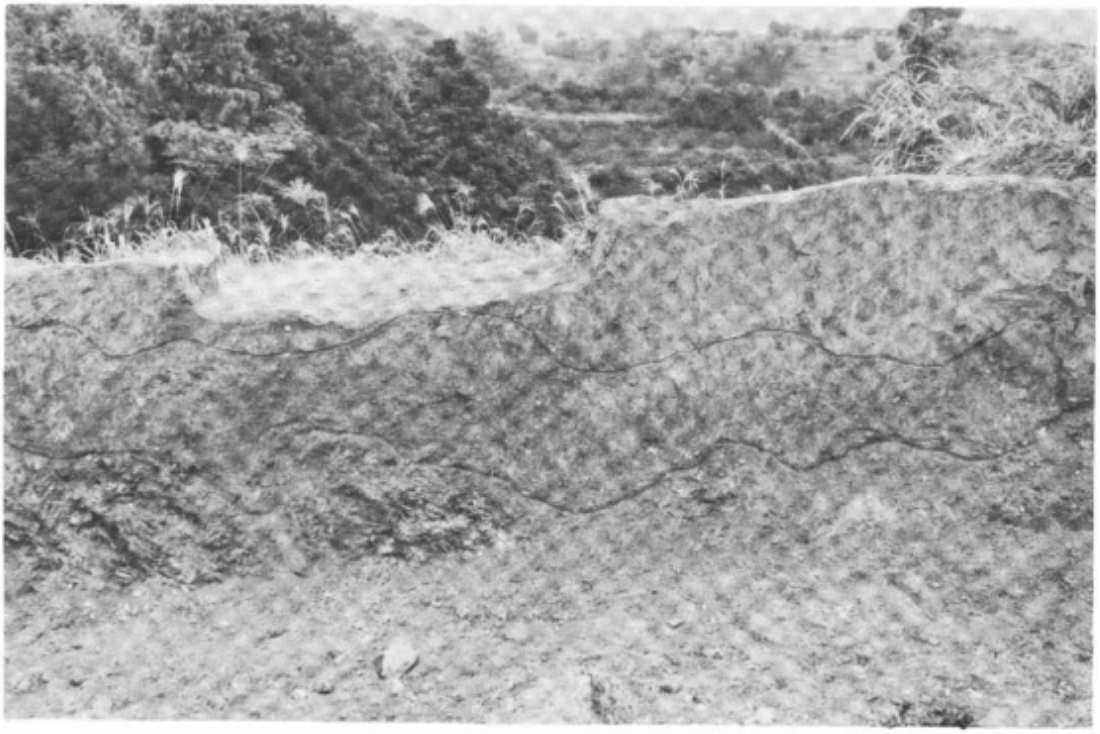


二号古墳石室掘りこみ　その1

図版15

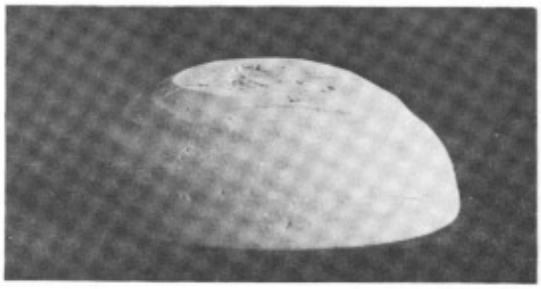
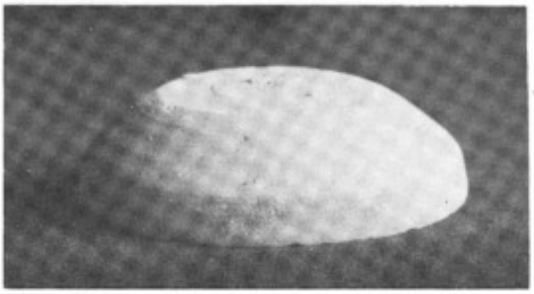
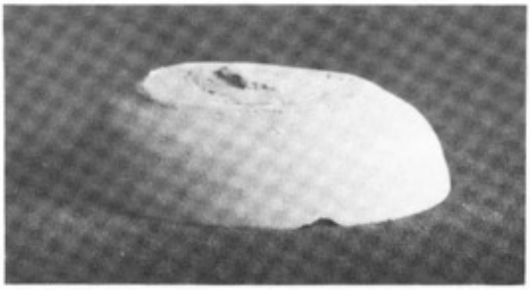
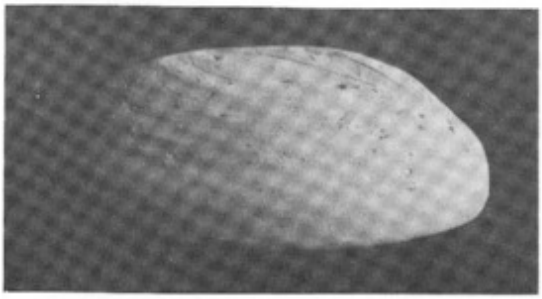
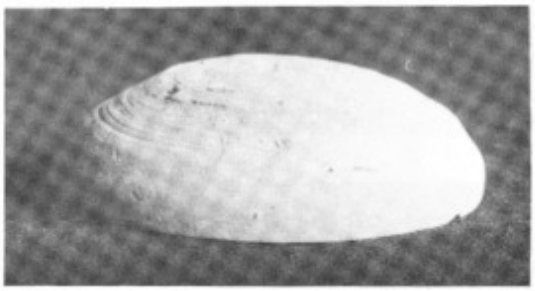


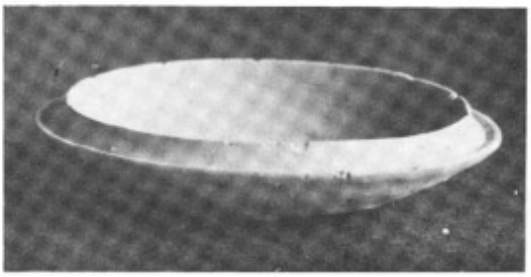
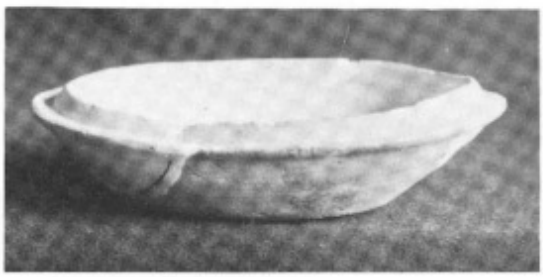
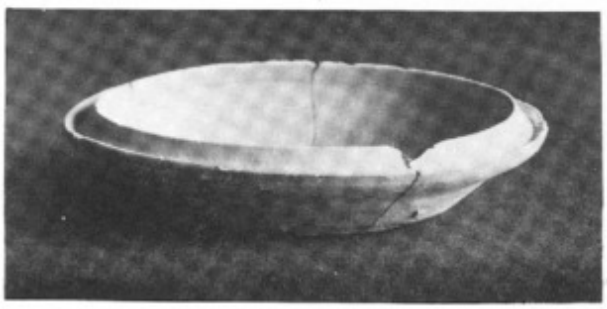
二号古墳掘りこみ　その２



二号古墳断面（一部）

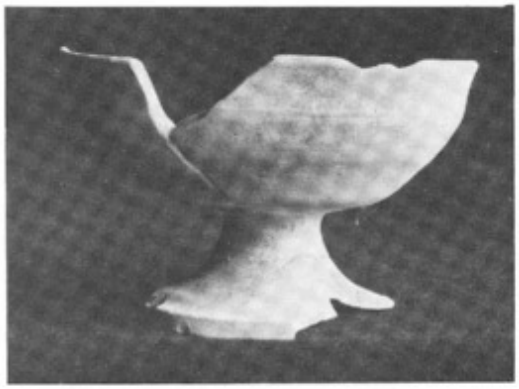
図版16

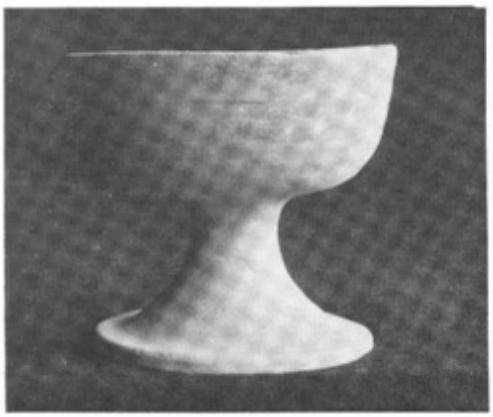






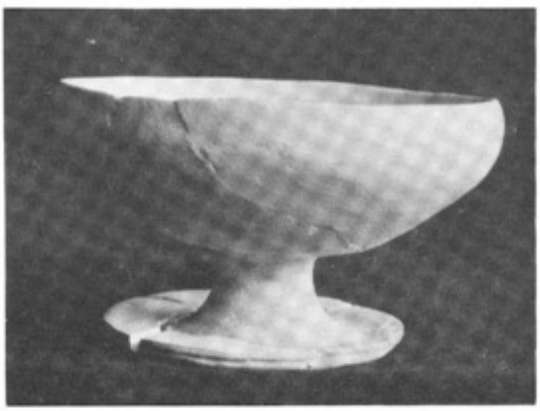




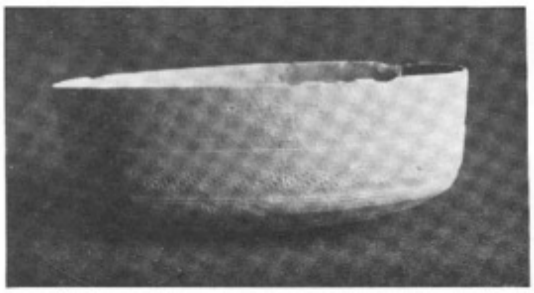
一号古墳出土須恵器

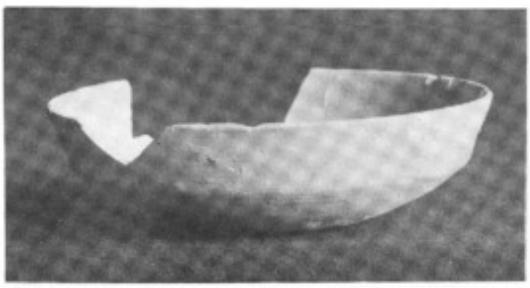
図版17

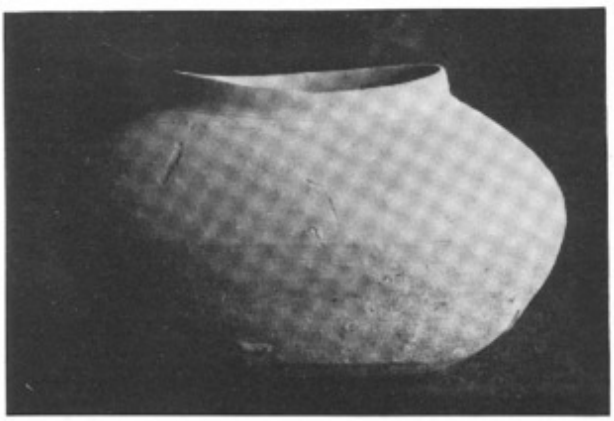






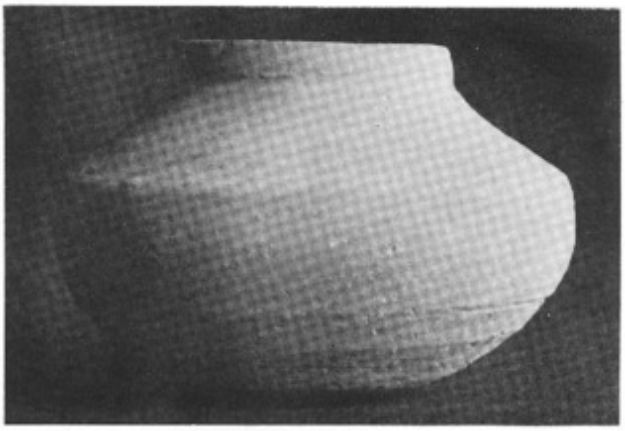






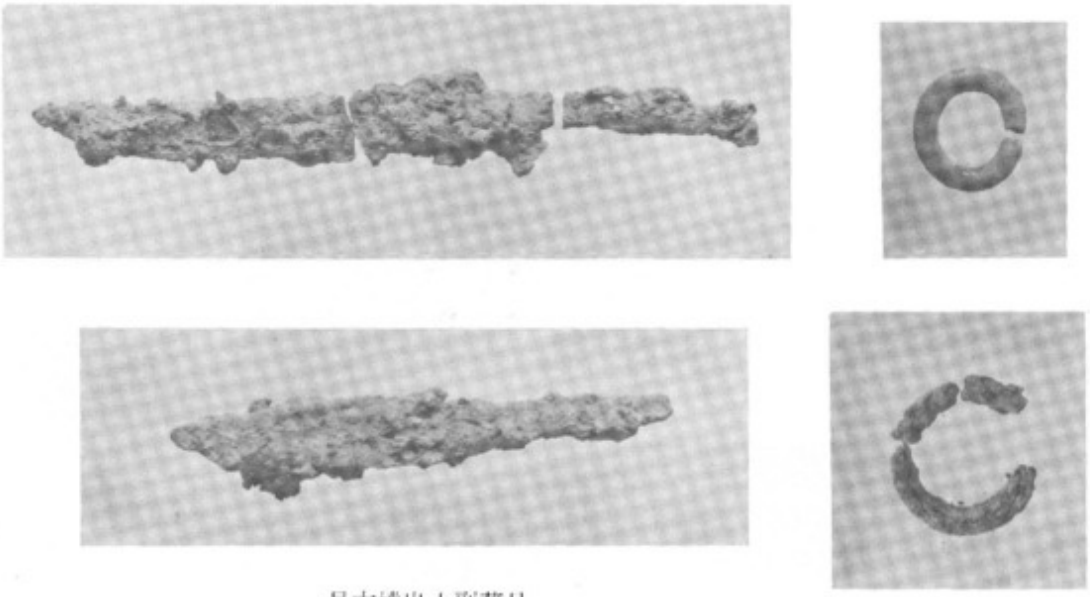
一号古墳出土須恵器

図版18

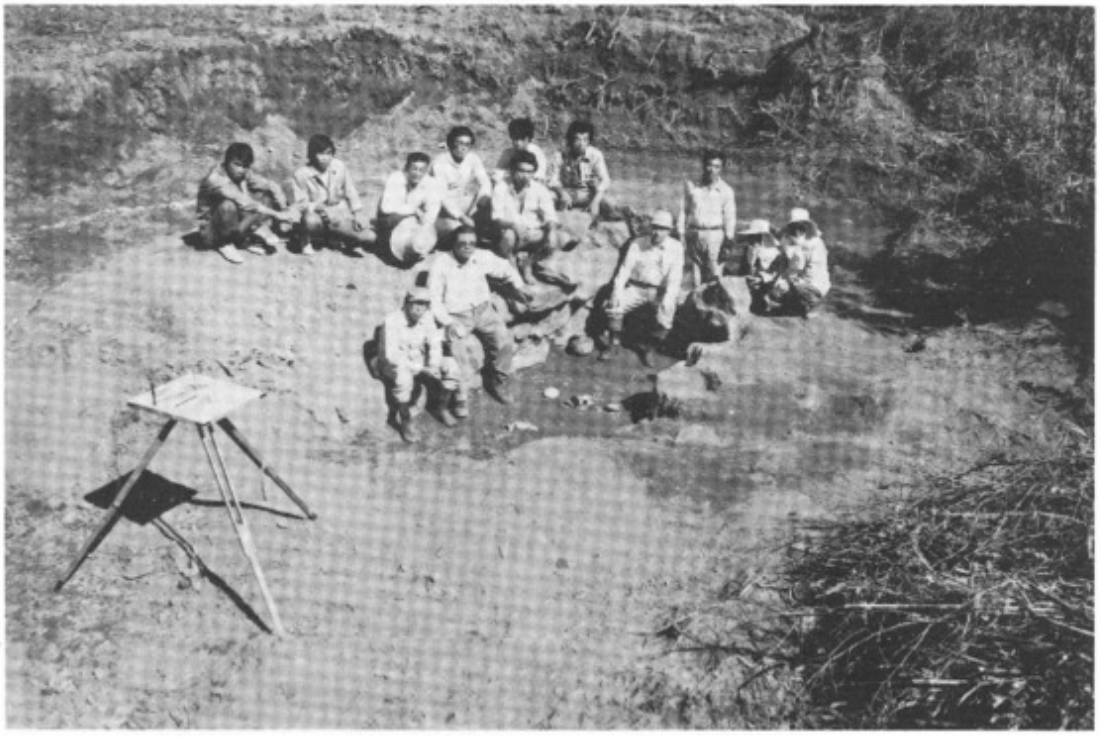


一号古墳出土
須恵器

図版19



一号古墳出土副葬品



発掘調査に参加じた人々

高知市文化財調査報告書
高知市　塚の原古墳群

発行日 ／ 1980年3月31日
発行所 ／ 高知市教育委員会
高知市丸の内1丁目2－10
印刷所 ／ 伸光堂
高知市上町3丁目8－10
TEL（0888）22－3161㈹